

東棺の底部と西棺の打ち欠かれた面（基底部方向）を合わせ口にしている。
 他の埴輪棺とは異なり、棺床及び上部の被覆に黄白色粘土が認められなかった。
 棺身の2個の埴輪の接合部周辺と両側の小口部周辺は、淡黄褐色粘質土で塞いでいた。
 墓壇は、平面形が棺円形で、底面はほぼ水平である。規模は東西2.85m×南北1.85m、
 深さ30cm以上である。掘形は、黄褐色細砂で埋め戻している。

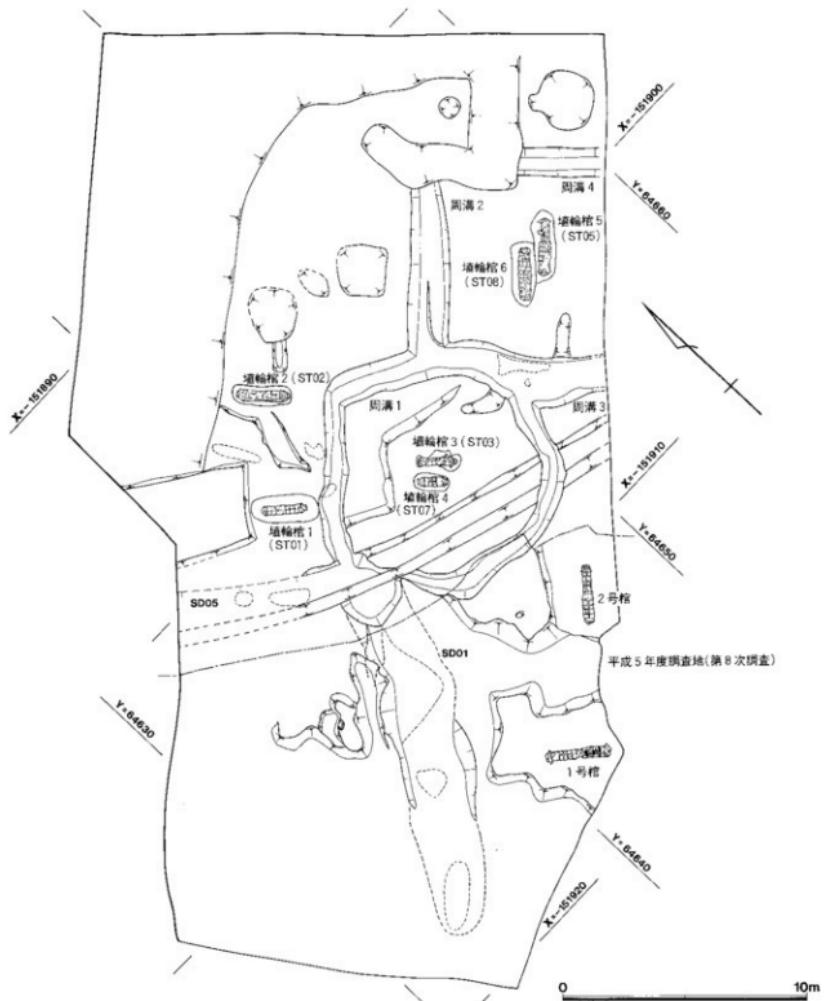


fig. 91 遺構平面図

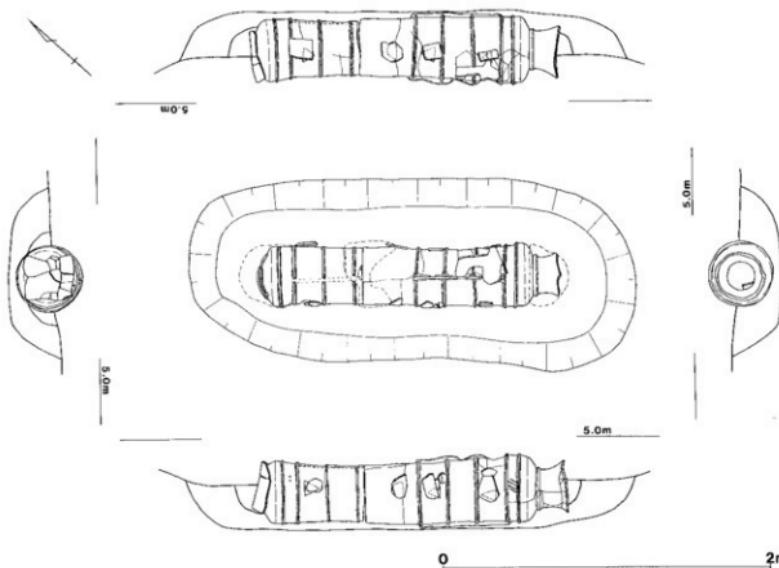


fig. 92 墳輪棺1 (ST01) 平・立面図

両方の小口部は、朝顔形埴輪の口縁部の破片で閉塞しており、透かし孔は、棺身として使用した鱗付朝顔形埴輪の鱗で閉塞していた。

棺内には、頭部を東側にした人骨が、頭蓋骨の周辺だけ残っていた。年齢・性別は現在のところ不明である。

頭蓋骨の下には、埴輪枕はなかったが、約5cmの厚さで、堅緻な黒褐色粘土が敷かれていた。

棺身の下部内面は、頭位付近のレベルの方が約5cm高い。

埴輪棺2 調査区の南西側、埴輪棺1の南西方4.5mで検出した。主軸方向はN 48°Wで、全長は、(ST02) 2.15m、幅40~50cmである。鱗付円筒埴輪あるいは鱗付朝顔形埴輪を2個組み合わせて、棺身として利用している。

埴輪棺は、まず、棺を安定させるために、棺床に黄白色粘土を厚さ10~15cm敷いている。

棺身の埴輪は、いざれも鱗が上下に、透かし孔が水平になるように設置した後、小口部及び透かし孔を閉塞している。さらに棺の上から厚さ10cm以上の黄白色粘土を被覆し、黄褐色細砂で埋め戻している。

墓壙は、平面形が梢円形で、底面はほぼ水平である。規模は東西2.15m×南北0.8m、深さ25cm以上である。

小口部は、両側とも朝顔形埴輪の口縁部で塞がれている。

また透かし孔は、朝顔形埴輪の口縁部の破片で塞がっていた。

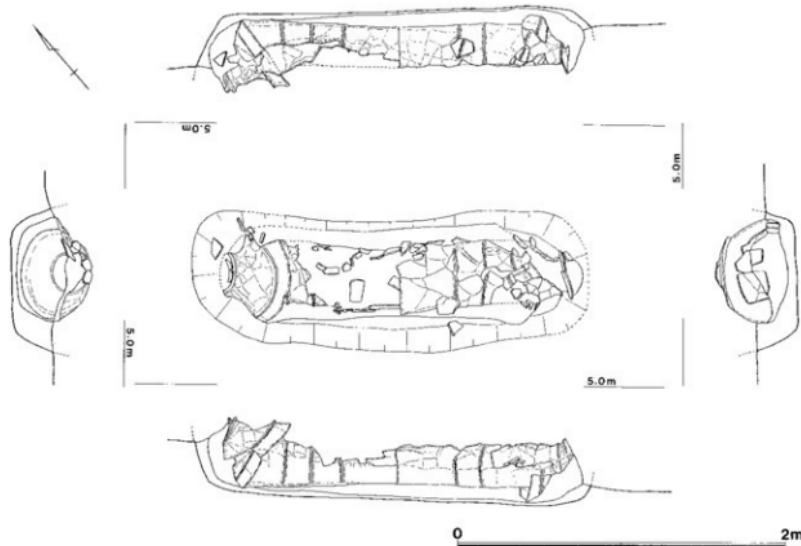


fig. 93 墳輪棺2(ST02) 平・立面図

西棺内には、朝顔形埴輪の破片を使用した枕が残存していた。この埴輪棺2の枕の破片と第8次調査・埴輪棺1の枕の破片が接合し、同一個体であることがわかった。

棺内には、頭部を西側にした人骨の、頭蓋骨の一部だけが残っていた。年齢・性別は現在のところ不明である。

埴輪棺3 (ST03) 調査区の南東側で検出した。主軸方向はN47°Wで、全長は、1.7m、幅35~55cmである。鏡付朝顔形埴輪1個を棺身として利用している。

松の木の移植などの搅乱により、かなり上側（地表面側）は破損していた。そのため、他の埴輪棺と比較すると、上部の被覆粘土や棺身の残存状況は悪く、透かし孔の閉塞状況など細部については不明である。

埴輪棺は、まず、棺を安定させるために、棺床に黄白色粘土を厚さ5~10cm敷いている。棺身の埴輪は、縁が上下に、透かし孔が水平になるように設置した後、小口部及び透かし孔を閉塞している。さらに棺の上から黄白色粘土を被覆し、黄褐色細砂で埋め戻している。

墓壙は、平面形が梢円形で、底面はほぼ水平である。規模は東西2.1m×南北0.9m、深さ30cm以上である。

小口部は、東側（基底部側）を蓋形埴輪の笠部で閉塞した後、さらに別の個体の蓋形埴輪の破片で塞いでいた。西側（口縁部側）は梢円形埴輪1個で塞いでいた。

この蓋形埴輪の内の1個体は、埴輪棺4の東側小口部の閉塞用の蓋形埴輪の破片と接合し、同一個体であることがわかった。

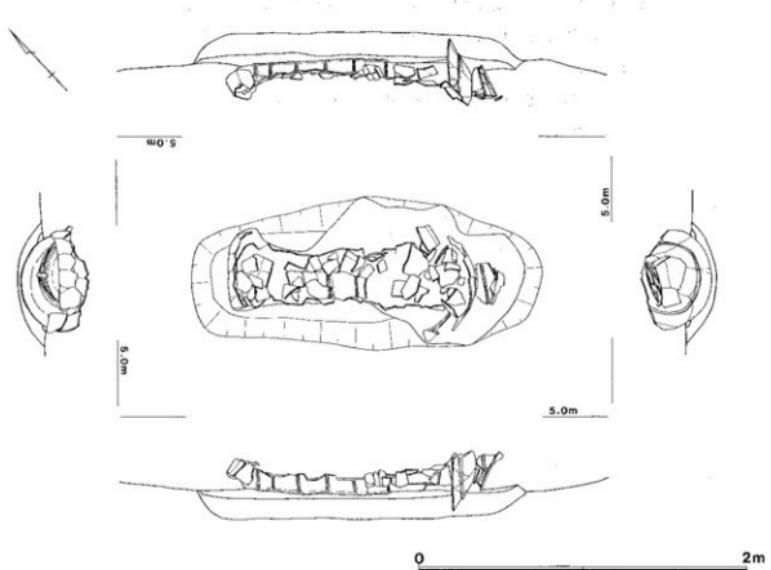


fig. 94 墓輪棺3 (ST03) 平・立面図

棺内には、人骨は残っていなかったが、棺内西端には、鰐付朝顔形埴輪の破片を使用した枕が残存していた。この枕の位置より、頭部を西側にしていたと考えられる。

この枕の破片は、埴輪棺3の棺身に使用した鰐付朝顔形埴輪の肩部の一部を利用している。

したがって、埴輪棺3と埴輪棺4は、同時に埋葬された可能性が極めて高い。

ただし、棺の掘形の土層の前後関係からすれば、埴輪棺4→埴輪棺3の順に埋葬されたと考えられる。

埴輪棺4
 (ST07) 墓輪棺3の南側約1.0mのところで検出した。主軸方向はN45°Wで、全長は、1.25m、幅30~40cmである。鰐付朝顔形埴輪1個を棺身として利用している。埴輪棺は、まず、棺を安定させるために、棺床に黄白色粘土を厚さ10~25cm敷いている。

棺身の埴輪は、鰐が上下に、透かし孔が水平になるように設置した後、小口部及び透かし孔を閉塞している。さらに棺の上から厚さ20cm以上の黄白色粘土を被覆し、黄褐色細砂で埋め戻している。

墓壇は、平面形が楕円形で、底面はほぼ水平である。規模は東西1.85m×南北1.0m、深さ40cm以上である。

今回検出した埴輪棺の中で最も上部の被覆粘土が良好に残存していた。

小口部は、東側（基底部側）を蓋形埴輪1個と円筒埴輪の破片で、西側（口縁部側）を朝顔形埴輪の破片で塞いでいた。

棺内には、人骨は残っていなかったが、棺内西端には、鰐付円筒形埴輪あるいは鰐付朝顔形埴輪の破片を使用した枕が残存していた。この枕の位置より、頭部を西側にしていたと考えられる。

透かし孔は、枕と同一個体である鰐付円筒形埴輪あるいは鰐付朝顔形埴輪の破片を使用して塞いでいた。

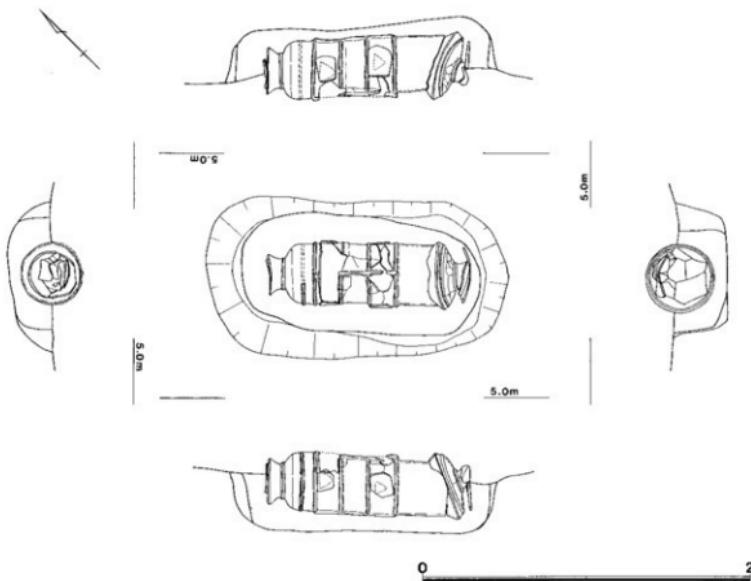


fig. 95 墓輪棺4(ST07)平・立面図

周溝1　埴輪棺3と埴輪棺4の周囲には、幅1.0~1.5m、深さ20~40cmの溝が巡っている。

周溝1は、埴輪棺3・埴輪棺4をほぼ中心として、円形に巡っているが、西側ではやや直線的にのびている。周溝1の外側では、南北10.0~10.5m、東西10~11mである。周溝1の内側では、南北7.5~8.5m、東西8.0~8.5mである。

また、周溝1から南側へのびる溝状造構(SD01)と西側へのびる溝状造構(SD05)を検出した。いずれも周溝1との土層による前後関係は確認されなかった。

SD01　第8次調査で検出したSD01の続きで、幅2.5~3.0m、深さ30cm以上である。周溝1との分岐点より南方約14mのところで、後世の削平により消失している。

SD05　幅2.0~2.5m、深さ10~30cmである。

周溝及びSD01・05の埋没土内からは、円筒埴輪や鰐の破片、土師器(小型丸底壺・甕・高坏等)が出土している。小型丸底壺には、底部の中央に穿孔したものも出土している。周溝1内の西側で、「ベンガラ」と考えられる赤色顔料を検出している。

赤色顔料は、周溝1の底面で、南北50cm×東西80cmの範囲にわたり確認された。丁度、埴輪棺4の主軸線上の頭位方向に当たっており、注目すべき点であるが、どのような目的・用途で使用されたかは現在のところ不明である。

- 埴輪棺5 調査区の北東側で検出した。主軸方向はN47°Eで、全長は、2.4m、幅35~50cmである。
(ST05) 鰐付円筒埴輪1個と円筒埴輪1個を組み合わせて、棺身として利用している。

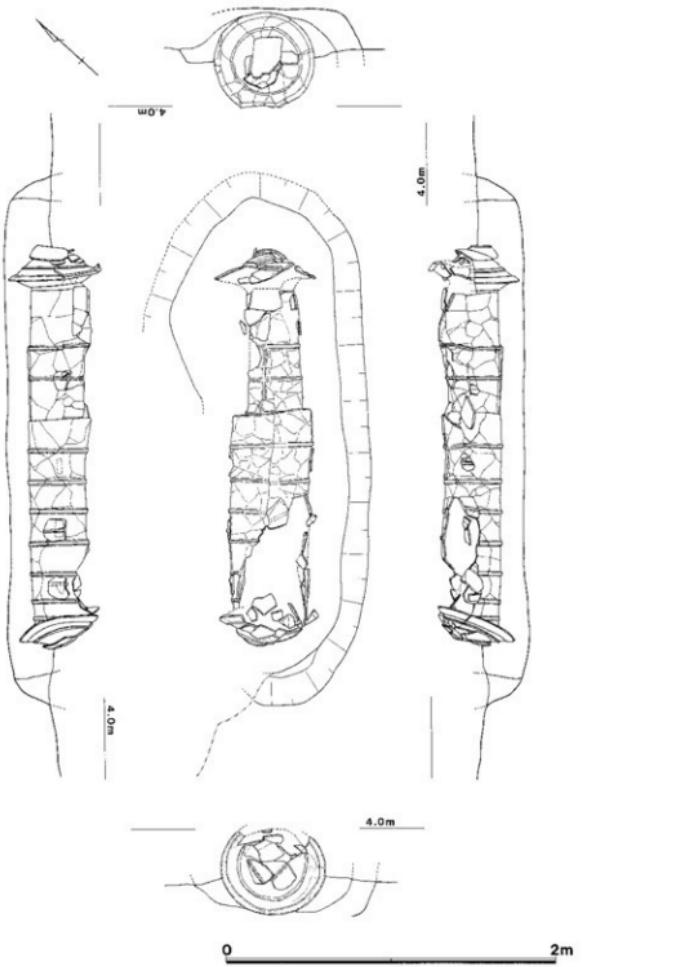


fig. 96 墓輪棺5 (ST05) 平・立面図

棺身の埴輪は、鰐が上下に、透かし孔が水平になるように設置した後、小口部及び透かし孔を閉塞している。さらに棺の上から厚さ10cm以上の黄白色粘土を被覆し、黄褐色細砂で埋め戻している。

墓壙は、平面形が梢円形で、底面はほぼ水平である。規模は東西1.0m×南北3.1m、深さ40cm以上である。

南棺の底部に、口縁部を打ち欠いた北棺の埴輪（口縁部側）を差し込んでいる。

埴輪棺5の棺床及び上部の被覆粘土は、埴輪棺6の被覆粘土の東側と約1.6mにわたって接している。

棺床及び上部の被覆粘土・棺の掘形の土層の前後関係から、埴輪棺6→埴輪棺5の順に埋葬されたと考えられるが、埋葬時期については、ほぼ同時である可能性が高い。

小口部は、蓋形埴輪2個と円筒埴輪の破片で塞いでいた。

南棺内には、鰐付円筒埴輪あるいは鰐付朝顔形埴輪の破片を使用した枕が残存していた。

枕のすぐ北側で、歯を検出した。歯は上顎部・下顎部とも残っていた。枕の位置とも合わせると、頭部を南側にしていたと考えられる。

透かし孔は、枕と同一個体である鰐付円筒形埴輪あるいは鰐付朝顔形埴輪の破片を使用して塞いでいた。

埴輪棺6 墓壙棺5の西側約1.0mのところで検出した。主軸方向はN47°Eで、全長は、2.2m、幅40~50cmである。2個の埴輪を組み合わせて、棺身として利用している。

埴輪棺は、まず、棺を安定させるために、棺床に黄白色粘土を厚さ10~15cm敷いている。

棺身の埴輪は、三角形の透かし孔が上下に、半円形の透かし孔が水平になるように設置した後、小口部及び透かし孔を閉塞している。さらに棺の上から厚さ10cm以上の黄白色粘土を被覆し、黄褐色細砂で埋め戻している。

墓壙は、平面形が梢円形で、底面はほぼ水平である。規模は東西1.0m×南北2.4m、深さ40cm以上である。

棺身の埴輪は、従来の朝顔形埴輪や円筒埴輪とは異なり、いずれも側面の形状が釣鐘形を呈しており、上面から見た平面形は梢円形である。口縁部から最上段の突帯にかけて、鶴冠状の突起を有する。基底部から胴部にかけて真っ直ぐ立ち上がった後、肩部から口縁部にかけて、内側しながら小さくなって終わっている。口縁部から最上段の突帯にかけてみられる鶴冠状の突起からして、「さしば」を模していると考えられる。「さしば」形埴輪は、大阪府藤井寺市・津堂城山古墳（4世紀末～5世紀初め頃）で類例が、確認されている。

いずれの埴輪とも側面に鰐は付かない。埴輪の器壁は、その他の埴輪に比べてやや薄い。

小口部は、梢円形埴輪の破片で塞いでいる。

棺内には、人骨は残っていなかったが、北棺北端で、棺身の埴輪の破片を使用した枕が残存していた。枕の位置より、頭部を北側にしていたと考えられる。

透かし孔は、鰐付円筒埴輪あるいは鰐付朝顔形埴輪の破片で塞いでいる。

周溝 また、埴輪棺5と埴輪棺6の周囲には、幅1.0~1.5m、深さ30~40cmの溝が巡っている（周溝2・周溝3・周溝4）。

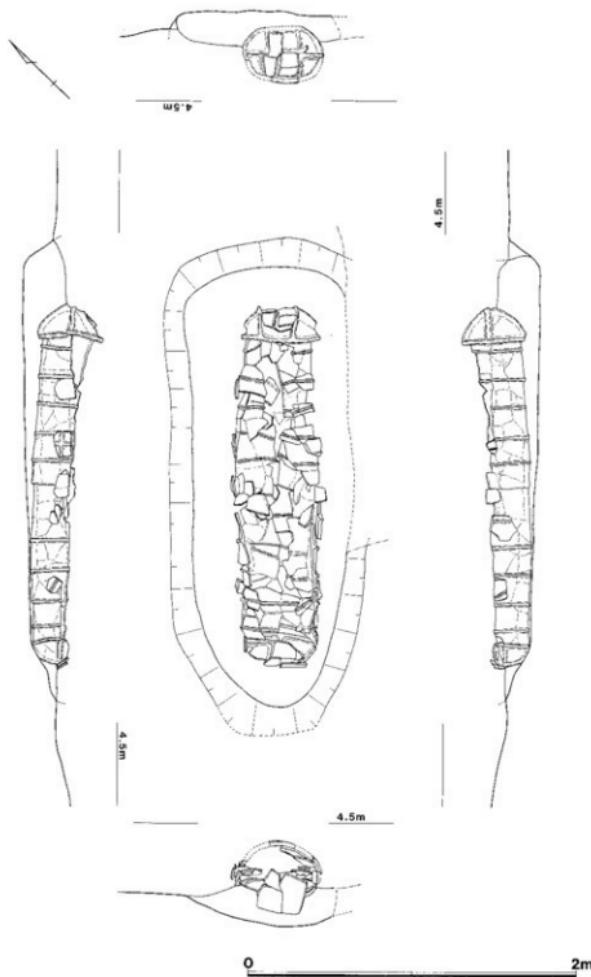


fig. 97 墳輪樁6(ST08) 平・立面図

周溝3及び周溝4の東側は調査区外にのびているため、全体の規模は不明だが、西側半分をそのまま反転させて復元したとすると、周溝の外側では、南北10.0~10.5m、東西約11.0mで、周溝の内側では、南北7.0~7.5m、東西8.0~8.5mとなる。

周溝内からは、円筒埴輪や鰯の破片、土師器（小型丸底壺・甕・高杯等）が出土している。

周溝 1 と周溝 2・周溝 3 の土層による前後関係は確認されなかった。また、周溝内から出土した土師器は、先年度の成果も合わせて検討した結果、いずれも布留式の新相の中でも、布留 3 式〔船橋 O-I 式併行：（4世紀末頃）〕に比定される。

周溝 1～周溝 4 は、ほぼ同じ時期に掘削され、溝を共有していた可能性が高いと考えられる。

したがって、埴輪棺 3～埴輪棺 6 の 4 基の埴輪棺は、ほぼ同時期に埋葬された可能性が考えられる。また、埴輪棺 1・埴輪棺 2 についても、埴輪棺 3～埴輪棺 6 との切り合い等による前後関係が明らかでないため、確定はできないが、おそらく、その他の埴輪棺とはほぼ同じ時期に埋葬された可能性が高いと考えられる。

また、周溝 1 の外側で、埴輪片が、かなり集中して検出された（埴輪 7・埴輪 8）。

この埴輪片を復元した結果、鰐付円筒埴輪の他、蓋形埴輪の一部であることがわかった。今回の調査では、いずれの埴輪棺でも、棺内及び棺外から、副葬品が検出されなかった。また、棺内にかなり棺外からの砂が流れ込んでいたため、人骨の遺存状況も悪かった。



fig. 98 調査区全景

3.まとめ

今回の調査で、かなり纏まって埴輪棺が検出されたことにより、舞子浜遺跡における古墳時代前期末～古墳時代中期初頭頃の葬送形態の一端が明らかになってきた。

当時の埋葬方法としては、土壙墓または木棺墓が一般的で、埴輪棺による埋葬というのは、極めて特殊であった。しかも、現在確認されている埋葬施設のすべてが、埴輪棺であり、他の埋葬形態を持たないという点でも注目されよう。

さらに棺形態において、他地域の埴輪棺では稀少な「さしば」形埴輪や鰐付朝顔形埴輪を使用している。

また、埴輪棺の埋葬に際して、なんらかの方位性を意識していた可能性も指摘できよう。

現在のところ、舞子浜遺跡周辺では、古墳時代前期末～古墳時代中期初頭頃に生活を営んだと思われる痕跡は発見されていない。舞子浜遺跡は、墓域のみであったのかまたは集落が営まれたとしても極短期間に限られていた可能性が高いと考えられる。

いずれにしても、舞子浜遺跡の全容を解明していくためには、さらに詳細な分析・検討を必要としており、今後の課題としたい。

15. 清水が丘遺跡 第1次調査

1.はじめに

垂水区の山田川流域には、左岸の丘陵上に旧石器時代から古墳時代までの遺跡である大歳山遺跡や投げ上銅鐸出土地、弥生時代中・後期の東石ヶ谷遺跡など弥生時代の集落が知られている。古墳時代の後期になると左岸の丘陵上には舞子古墳群、右岸の丘陵上には多聞古墳群とあわせて100基以上の群集墳が築かれている。しかし、古墳時代の集落はこの流域では知られていなかった。

平成6年に垂水区清水が丘3丁目において共同住宅建設の計画があがり、試掘調査を実施した結果、古墳時代の遺物包含層と遺構が確認された。当地はこれまで遺跡の存在は知られていなかったため、清水が丘遺跡と名付けて調査を実施することになった。

当地は舞子古墳群や東石ヶ谷遺跡のある舞子丘陵が山田川に向かって下ってくる尾根の先端の平坦地に立地し、標高29m、山田川からの比高約10mに位置する。

調査は建設予定範囲のうち南側2/3は全面、北側1/3は建物基礎工事にかかる部分についてのみ実施した。

2. 調査の概要

基本層序

調査の結果基本層序は、上から現代盛土層(40~50cm)・近現代耕作土層(20cm)・明淡黄灰色砂質シルト(=近世耕作土層/20cm)・黄褐色礫混じり粘土(=近世盛土/30cm・但し北側には無し)・淡灰色砂質シルト(=中世耕作土層/20~30cm)・暗茶灰色シルト(=弥生時代~奈良時代遺物包含層/10cm)・灰黃褐色粘質シルト(=土壤化層/10cm)・黄褐色礫混じり粘土(=遺構面)となる。

黄褐色礫混じり粘土層上面からは、弥生時代中期から奈良時代の遺構が検出された。



fig. 99
調査地点位置図
1 : 2,500

SB03 一辺6.5mの隅丸方形の竪穴住居である。中央土坑と周壁溝を有し、主柱穴は4本である。中央土坑は1.7×1.4mの楕円形で、深さは40cmで中には炭・灰・焼土が詰まっている。主柱穴の間隔は約3mで、それぞれの直径は50cm、深さ60~80cmを測る。中央土坑から約1m離れた床面に台石が置かれていた。この住居の埋土中には炭・焼土が多く混じっており焼失したと考えられる。

埋土中から弥生土器片や石錐が出土しており、弥生時代中期に属すると考えられる。

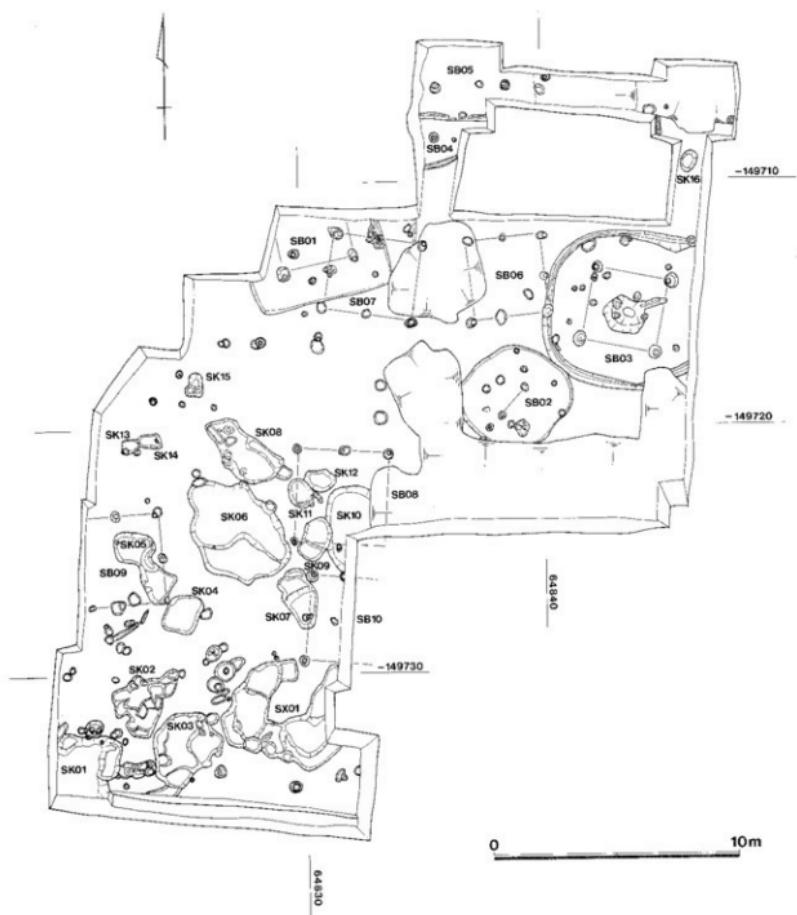


fig. 100 道構平面図

SB02 一辺約4.1mの隅丸方形の堅穴住居である。主柱穴は2本である。中央土坑と周壁溝は存在しない。主柱穴の間隔は約1.5mで、それぞれの直径は30cm、深さ20cmを測る。床面に2個、住居内の土坑中に1個の台石が存在した。この住居も埋土中には炭・焼土が多く混じっており焼失したと考えられる。

埋土中から弥生土器片が出土しており、SB03を切っていることから弥生時代後期の住居と考えられる。

SB01 東西方向の一辺が5.8mを計る方形の堅穴住居である。南北方向は調査区外に出ているため規模は明らかでない。主柱穴は4本と考えられるが調査区外に出ているため2本のみ確認された。主柱穴の間隔は約3.0mで、それぞれの直径は40cm、深さ30cmを測る。遺物は少なく、埋土中から須恵器片が僅かに出土しただけだが、古墳時代後期の住居と考えられる。

SB05 東西一辺5.3m前後の方形の堅穴住居である。西と北側は調査区外に出ているため規模は明らかでない。主柱穴は4本と考えられるが調査区外に出ているため2本のみ確認された。主柱穴の間隔は約3.0mで、それぞれの直径は40cm、深さ30cmを測る。南辺には途中途切れではいるが周壁溝を有する。遺物は少なく、埋土中から須恵器片が僅かに出土しただけだが、古墳時代後期の住居と考えられる。

SB04 円形ないしは隅丸方形の堅穴住居である。ほとんどが調査区外に出ているため規模は明らかでなく、主柱穴も明らかでない。周壁溝は有するが全周するかどうかは不明である。遺物は少なく、埋土中から弥生土器片が僅かに出土しただけだが、SB05に切られていることなどから弥生時代の住居と考えられる。

掘立柱建物 SB06からSB10の5棟はいずれも2間×2間で東柱を持たない掘立柱建物である。ただしSB10とSB11は調査区外に延びるため、もう少しだきくなる可能性がある。いずれの建物も南北方向の主軸は真北から数度振った程度である。時期はどの柱穴からも細片の土器しか出ておらず、明らかでない。各建物の計測値は下表の通りである。



fig. 101 調査区全景

遺構番号	規模 (m)		南北主軸方向	柱穴の直径 (cm)	柱穴の深さ (cm)	備考
	東西	南北				
SB06	3.1	3.4	N	40	30	SB03を切っている
SB07	3.6	3.1	N 10° E	40	30	SB01に切られている
SB08	3.8	3.8	N 3° E	40	35	
SB09	不明	3.5	N 5° W	30	30	
SB10	不明	3.5	N 6° E	30	30	

土 坑 SK01~10・SX01はいずれも不定形の土坑である。規模は長軸が0.8mから5mと大小様々だが、深さはいずれも20cm前後と浅く、底面の凹凸が激しいという共通点がある。また以上の土坑は調査区の南に集中しており、北側の遺構面に疎が多く混じる層のところには存在しない。以上の特徴からこれらの土坑は粘土を採掘した跡の可能性がある。

時期は出土遺物から古墳時代後期と考えられる。

SK16は長軸85cm、短軸60cm、深さ20cmの楕円形ですり鉢状の土坑である。中から弥生時代中期の壺が出土している。

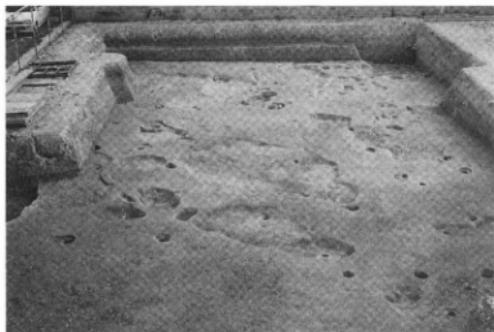


fig. 102
調査区南土坑群

遺物包含層からも多数の遺物が出土している。土器は弥生時代中期（第IV様式）から後期（第V様式）の壺・壺・高坏・製塙土器と、古墳時代後期の須恵器の坏・高坏・壺・製塙土器、奈良時代の須恵器の坏等が出土している。

そのほか、石製品として弥生時代中期の片岩製の石臼、サヌカイト製の石鎌・石錐・楔形石器・削器・擦り石・叩き石・偏平片刃石斧・輕石製玉砥石、古墳時代の滑石製勾玉模造品などが出土している。

3.まとめ

今回の調査で清水が丘遺跡は弥生時代中期から奈良時代にかけての遺跡であることが、明らかになった。特に先記したように、これまで山田川流域では古墳時代や奈良時代の集落遺跡の存在は知られていなかったが、今回の調査によって僅かではあるが、当時の人々の生活の跡が確認された意義は大きい。また弥生時代の遺跡も舞子丘陵から派生した尾根上にも存在することが確認され、この地域の弥生時代の集落の分布を知る上で貴重な資料となる。

16. 白水遺跡 第3次調査

1.はじめに

白水地区土地区画整理事業が計画され、その事業区域内において平成2年3月と平成3年11月の2度にわたって試掘調査を実施した。その結果、沖積地部分では古墳時代と中世の遺物包含層が、丘陵部分では平安時代の遺物包含層が確認された。平成5年度から埋蔵文化財調査を継続して実施している。

白水遺跡は明石川の支流である伊川と永井谷川の合流する地点付近の伊川右岸に立地する。遺跡の範囲は、これらの川の沖積地部分と、その背後の丘陵部分に分けられる。

沖積地のすぐ北側には北別府遺跡、南側には潤和遺跡・新方遺跡、伊川の対岸には南別府遺跡が存在する。背後の丘陵上には、白水瓢塚古墳・延命寺古墳が存在する。

これまでにこの遺跡内では、平成4年度に倉庫建設に伴って調査が実施されており、弥生時代後期後半の堅穴住居と平安時代後期の溝が検出されている。また古くに、付近の道路建設の際に、古墳時代中期の土師器小形丸底壺とその中に入れられた滑石製の有孔円盤が出土している。また平成5年度の調査では、古墳時代中期の祭祀遺構や古墳時代後期の水田、平安時代から鎌倉時代にかけての掘立柱建物などが見つかっている。

今年度は第2トレンチと第4トレンチに関しては昨年度から継続しての調査を行い、また新たに第5・第6トレンチを設定して調査を実施した。



fig. 103 調査地点位置図 1 : 2,500

2. 調査の概要 基本層序は上層より、耕土・明黄褐色砂（近世耕土）・灰色シルト（中世耕土）・明淡
第2トレンチ 黄色粘質砂（第1遺構面ベース）・暗茶灰色粘質シルト・暗灰色粘土・灰茶色粘質砂（第
基本層序 2遺構面ベース）となっている。

第2トレンチは、昨年度第1遺構面と第2遺構面の土器溜りの調査までが完了している。第1遺構面では4基の土器溜り(SX01~04)が検出され、第2遺構面では9基の土器溜り(SX05~13)が検出された。これらの土器溜りからは、滑石製の有孔円盤・勾玉模造品・白玉などの石製品や製塙土器などが土師器の壺・甕・高坏等とともに出土している。これらの出土遺物から土器溜りは祭祀に係わるものと考えられる。これらの遺構の時期は、5世紀後半から6世紀前半と考えられる。

今年度は第2遺構面の流路等の調査を実施した。

流路1　流路1は昨年度の調査で第1遺構面のSD02としていたものである。第2遺構面では幅約8m、深さ約1mを測り、東西方向に流れている。埋土は粗砂・砂砾が中心である。遺物は須恵器・土師器片が出土している。

流路2　流路2は北西から南東方向に流れる流路である。最終埋没時に断面V字状に掘り直して溝として活用している(流路2(新))。それ以前の流路は流路2(古)とする。

流路2(新)は幅約5m、深さ約1.2mで、東西方向に流れる溝である。埋土は粘土・シルト中心である。遺物は6世紀前半の須恵器・土師器等が出土している。土層観察の結果流路2(新)は第1遺構面の遺構であることがあきらかとなった。

流路2(古)は北西から南東方向に流れる流路である。昨年度調査の第1トレンチSD01に続く流路と考えられる。多数の木製品・木材・土器・種子・葉などが出土している。



fig. 104 第2トレンチ全景



fig. 105 流路2木製品出土状況

土器類としては、土師器の甕・壺・高坏・椀が出土しており、甕には煮炊きしてこびりついた米が付着したものもある。須恵器としては坏・高坏等が出土しており、その他、製塙土器が出土している。

木製品としては、鉤・又鍬・堅杵・楋の子・機織り具・木鎌のほかに用途不明の棒状の木製品も多数出土している。

これらの遺物の時期は5世紀後半と考えられる。

- 第4トレンチ** 第4トレンチの基本層序は上から、耕土・暗灰黄褐色砂混じりシルト（近世耕土）・明灰色粘質シルト（近世耕土）・暗灰色粘質シルト・明淡黄褐色砂（第1遺構面ベース）・灰色粘質シルト（第2遺構面ベース／古墳時代水田耕土）・黒褐色粘土・暗灰色粘土（第3遺構面ベース）となる。
- 昨年度の調査は、第2遺構面まで実施しており、今年度は第3遺構面の調査とそれ以下の断ち割り調査を行った。
- 第1遺構面では、11世紀前半の4間×4間の掘立柱建物1棟（SB01）と溝が確認された。第2遺構面では古墳時代後期の不定形水田が確認されている。
- 第3遺構面** 第3遺構面では溝1条（SD06）が確認された。幅約1.2mで深さ約20cmを測る。埋土中から弥生時代後期の甕片が出土している。
- 第5・6トレンチ** 第5・6トレンチの基本層序は、上層より耕土・黄褐色砂（近世耕土）・灰色シルト・暗茶灰色粘質シルト（第1遺構面=中世前期遺構面）・明灰色シルト（第2遺構面=古墳時代遺構面）・淡褐色砂礫となる。
- ただし第5トレンチの南端では、暗茶灰色粘質シルト層は存在せず、第1遺構面の遺構と第2遺構面の遺構が同一位置で検出された。
- 第1遺構面** 第1遺構面では、掘立柱建物1棟（SB01）と溝2条（SD01・02）・流路1条（SD08）が検出された。
- SB01** SB01は南北3間×東西2間以上の掘立柱建物である。南北方向の柱間距離は1.8～2.3mで東西方向の柱間距離は2.0～2.4mである。柱穴の大きさは直径30cm、深さ20cmである。柱穴の掘形から12世紀前半の須恵器の小皿が出土している。
- SD01** SD01は第5トレンチの中央を南北方向に貫く溝で、幅約60cm、深さ約20cmである。
- SD08** SD08は第5・6トレンチにかけて北東から南西方向に流れる流路である。埋土は粗砂礫である。埋土中より11世紀後半の須恵器の椀と小皿が出土している。
- 第2遺構面** 第2遺構面では掘立柱建物4棟（SB02～05）、土器溜り4基（SX01～04）、埋甕2基（SP02・03）、溝17条（SD03～19）、土坑等が検出された。
- 土器溜り** SX01は遺構面の直上に直径約1mの範囲で甕の破片が集積している。土器の近辺は、僅かに掘り窪められている。
- SX02はSD18の底に土器の甕・高坏が集められている。
- SX03はSD13の埋土中層に堆積した土器溜りである。その出土状況からSD13の南側に置かれていた土器が転がって堆積したものであると考えられる。土器の甕・壺・高坏・須恵器の坏などの土器類のほかに滑石製の有孔円盤や白玉が出土している。
- SX04は1.8×2.4m、深さ20cmの土坑に高坏を主に集積した土器溜りである。そのほとんどが土器の高坏だが、1点のみ須恵器の高坏の脚部がある。
- 掘立柱建物** 掘立柱建物のうちSB02～05はいずれも2間×2間の建物である。柱間距離はいずれも約1.8mである。またSB03以外は東柱を持つ。SB06は1間×2間の建物である。これらの掘立柱建物は出土遺物や、いずれも土器溜りを含む溝を切っていることなどから、古墳時代中期後半～後期前半のものと考えられる。
- 埋甕遺構** SP02は直径40cmのピットに甕を正置で据えてある。L字縁部はSD13に削平されて存在し



fig. 106 第5・6トレンチ全景

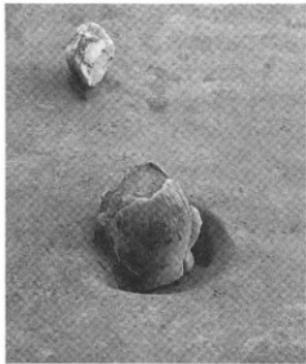


fig. 107 ピット03

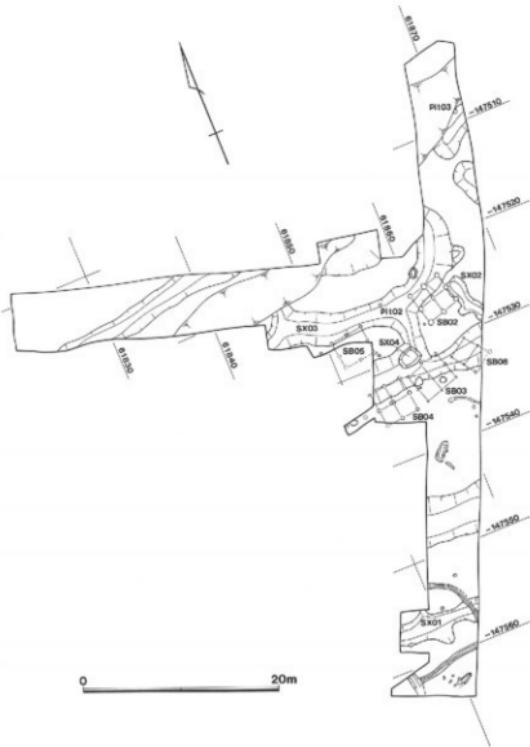


fig. 108 第5・6トレンチ遺構平面図

ない。時期は弥生時代後期のものである。

SP03は長径45cm、短径30cmの楕円形のピットに甕を倒置で据えてある。底部はSD15に削平されて存在しない。時期は古墳時代中期のものである。

また、古墳時代中期後半の地震による液状化現象の跡（噴砂）が第5・6トレンチの各所で検出されている。

3.まとめ

今回の調査では、第2・5・6トレンチでは古墳時代中期後半の遺物・遺構が多く確認された。特に滑石製品を含む土器滲りや、第2トレンチの流路2で出土した多数の木製品や土器は祭祀に伴うものも含まれ、貴重な資料である。これらの土器滲りは溝や流路の付近に多くあることや、この調査区は伊川に近く、小さな流路が数条流れていることから水辺の祭祀と考えられる。またこれらの遺構と同時期かまたは直後の掘立柱建物群が検出され、今後この遺跡の集落構造を解明していく上で手掛かりとなる。

白水遺跡は引き続き調査が行われていくが、今後調査が進めばより一層この地域の歴史があきらかになっていくと思われる。

17. 新方遺跡 北方地区 第4次調査

1. はじめに

新方遺跡は、山陽新幹線敷設に伴う調査によって明らかになった遺跡であり、昭和45年度の調査において弥生時代中期～鎌倉時代の遺物が多量に発見されたのをその端緒とする。

その後の調査により、弥生時代の集落や墓域などが明らかにされてきており、特に弥生時代中期～古墳時代にかけての玉造り工房は、著名である。

今回の調査は、都市計画道路明石木見線の街路築造工事に伴うものであり、協議の結果、工事により埋蔵文化財に影響を与える部分について調査を実施した。

2. 調査の概要

調査は、生活道路確保のため、3区画に別けて実施した。さらに、昨年度一部未調査の部分についても今回調査を実施した。便宜上、南より第1～4調査区とした。

以下、各調査区の概要について略述する。



第1調査区	・一番南に位置する調査地で、遺構面3面を確認した。
第1遺構面	褐黄色土をベースとして、土坑7基、耕作痕を検出した。
SK01	東西1.1m×南北0.9m、深さ50cmの隅丸長方形の土坑である。壁面は垂直で、底部に20~30cmの石が3個入れられていた。
SK02	SK01と同様の土坑で、東西0.8m×南北0.6m、深さ40cmとやや小ぶりである。
SK05	調査区西壁に懸かって検出された土坑で、SK01・02と同じ形態をもつ。南北1.0m、深さ50cmである。
耕作痕	周辺の地割りと同方向の幅20cmの溝を多数検出した。深さは、深いもので10cm程度である。
第2遺構面	明褐色黄色土をベースとして溝、ピット等を検出した。
SD21	調査区の中央部を東西に流れる幅0.6~1.6m、深さ20~30cmの溝である。東側ほど幅は広がり、深くなっていく。古墳時代前期と思われる土師器片が少量出土した。
ピット	調査区の中央部~北部にかけてまとまらないピットが18基検出された。いずれも浅く、時期等は不明である。
第3遺構面	明褐色黄色土の下に洪水砂状に堆積する淡灰緑色板細砂に覆われる様にして暗灰黑色粘土をベースとした水田畦畔が検出された。
水田	水田区画は、地形に沿ったかたちで、南北に細長いもので6枚以上検出された。また南端においては、方向をそろえる溝も検出されており用水路と考えられる。 畦畔は、南北方向のもので幅40cm、高さ8cm、東西方向のもので幅25cm、高さ5cmほどで、断面形は蒲鉾形であった。 畦畔どうしは、直交する箇所はみられず、すべてT字形に交わる。 この水田面直上において、弥生式土器と思われるもの数点と大型蛤刃石斧の残欠が1点出土した。 また全面に淡黄茶色細砂を含む稻種痕が確認された。
第2調査区	第1・3調査区の調査終了後、調査した部分である。遺構面3面を確認した。
第1遺構面	褐黄色土をベースとして、掘立柱建物1棟、土坑、溝、落ち込み状遺構、耕作痕を検出した。
SB01	調査区北部においてピット1~9がコ字状に並んで検出された。削平、攪乱により規模等不明であるが、掘立柱建物であると考えられる。
SK01	調査区南部で検出された長軸1.6m、短軸1.2m、深さ40cmの楕円形の土坑である。
SK04	第1調査区SK01~03と同じ形態の土坑である。
SX01	調査区の中央部でU字形に掘り込まれた幅1.5~2.0m、深さ20cmの遺構である。中世の須恵器、土師器が出土した。
第2遺構面	古墳時代前期~奈良時代にかけての遺構面と考えられる。遺構の残りは悪い。土坑、ピット、溝、土器溜まりを検出した。
ピット	調査区の中央部南側付近において一列に並ぶピットがみられる。
第3遺構面	調査区の南半分において第1調査区に続く水田11面以上が検出された。北側においては、土壤化した土はみられるものの畦畔等は、検出されなかった。なお第1調査区よりつづく

洪水砂は、調査区北3分の1ほどで途切れている。

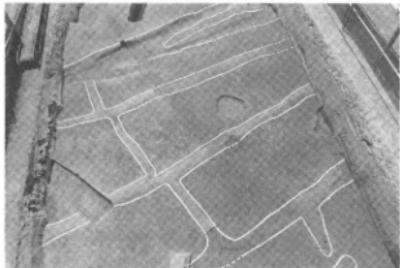


fig. 110 第1調査区水田



fig. 111 水田稻株痕

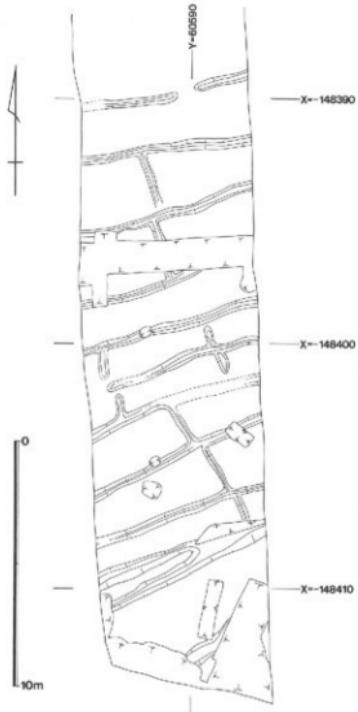


fig. 112 第1・2調査区第3遺構面平面図

第3調査区

先年度の調査区につながる部分である。遺構面を4面確認した。

第1遺構面

耕作痕および土坑2基を検出した。

SK02

直径2m、深さ1mほどの土坑である。近世の陶磁器が出土した。

第2遺構面

調査区北側約3分の1ほどに堆積する褐色色粘土をベースとしてピット、落ち込み状遺構を検出した。

第3遺構面

他の調査区の第2遺構面に対応する面である。溝および、浅い土坑を検出した。

SD21

調査区南東部を北西から南東に流れる、幅1.2m、深さ20cmの溝である。古墳時代前期と思われる土師器が少量出土した。

第4遺構面

第1・2調査区同様土壤化した土層が確認されたが、畦畔等は検出されなかった。
先年度実施された調査において未掘であった部分である。約30m³あり遺構面を2面検出した。

第1遺構面

耕作痕および東西に流れる土坑1基、溝2条を検出した。

第2遺構面

溝、土坑、ピット等を検出した。溝、建物等、前回の調査につながるものもみられる。

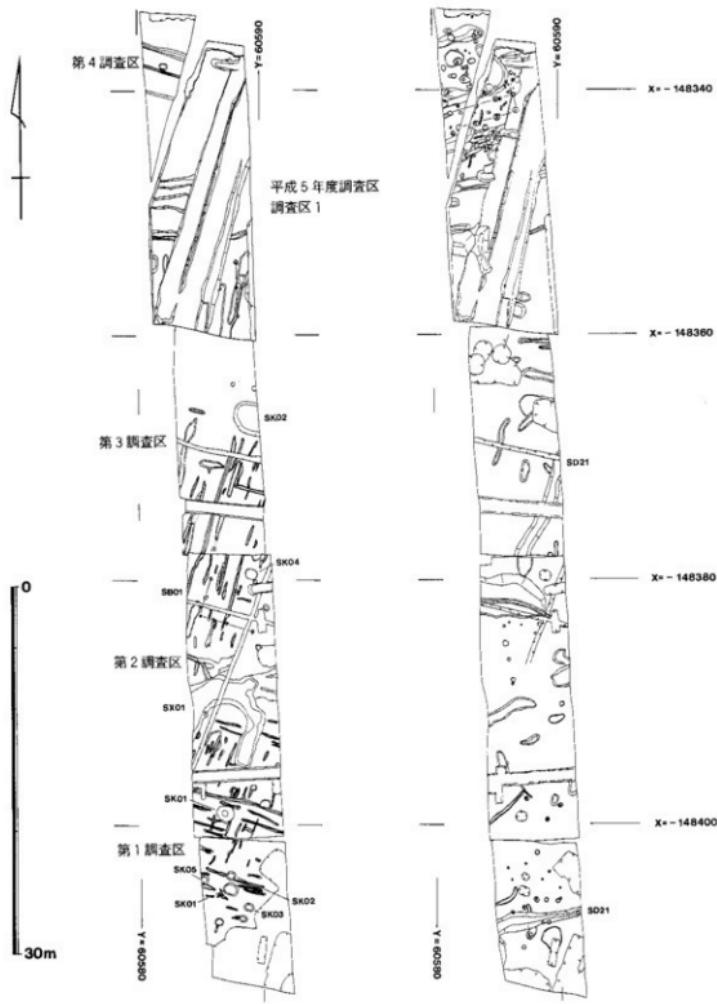


fig.113 第1～4調査区遺構平面図（左：第1遺構面 右：第2遺構面）

3.まとめ

今回の調査地点は、遺跡のはば南端に位置する。遺構の存在は希薄であり遺物の出土量も少なかった。

しかし古墳～奈良時代に相当する遺構面のさらに下層から弥生時代と考えられる水田面を確認することができた。従来、弥生時代の明石川流域において拠点集落といわれている新方遺跡の集落構成を明らかにしていくための貴重な資料であるといえよう。

18. 新方遺跡 丁の坪地点 第5次調査

1.はじめに

新方遺跡は、明石川と伊川に挟まれた沖積地に立地する。昭和45年に始まった山陽新幹線建設に伴う分布調査・試掘調査によって発見され、その後の調査で、弥生時代前期から中世にいたる、複合遺跡であることが判明した。これまでの調査では、弥生時代の堅穴住居、周溝墓、古墳時代の玉造り遺構などが確認されている。

このたび、当該地において共同住宅建設が計画されたため、試掘調査を実施したところ（試掘坑5か所設定）、事業地全域で遺物包含層を確認した。そのため、建築工事で埋蔵文化財に影響を及ぼす建物基礎部分について、発掘調査を実施した。

調査の都合上、西北端のグリッドをG 1とし、以下南東端のグリッドのG 20まで調査区の名称を与える。

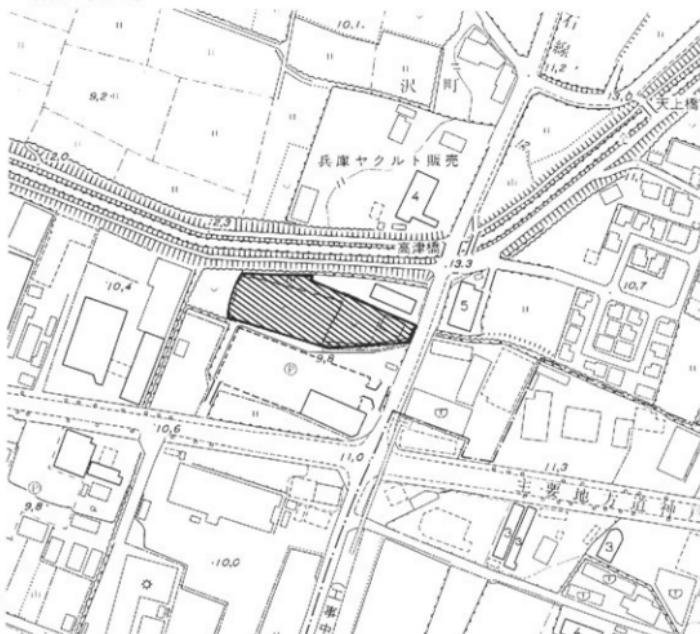


fig. 114
調査地点位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

現地表下約30~50cmで、溝と土坑を検出した。時期は、中世以降と考えられる。

第1遺構面

G 9で検出した土坑である。北半は調査区外のため規模は不明であるが、現状では、南北約40cm、東西約140cm、深さ約46cmである。埋土は淡灰色シルト質土に砂が混じる。

SK09

SD04

G 15とG 19で検出した、北西から南東方向の溝である。G 15側では、幅約50cm、深さ約56cmのV字断面であり、G 19側では、幅約80cm、深さ約54cmで、U字断面となる。白灰色細砂混じりシルトを埋土とする。

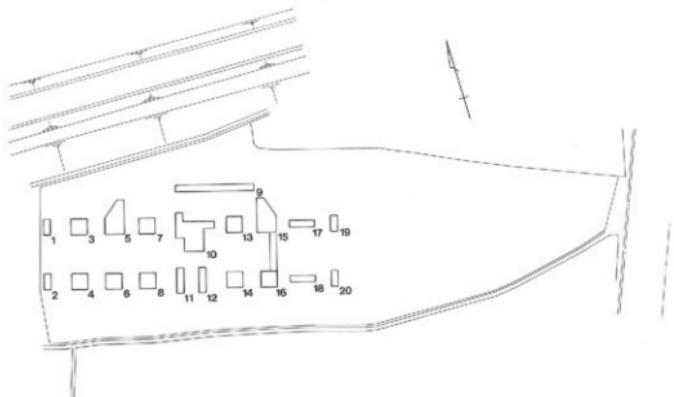


fig. 115 調査区平面図



fig. 116 調査区断面図

第2遺構面 現地表下約120cmで検出した。竪穴住居、溝、ピットなどである。時期は、弥生時代中期後半と考えられる。

SB01 G 15の南半部分で検出した竪穴住居である。拡張区で規模を確認した。直径約5.3mのやや歪な円形である。深さは約40cmである。柱穴はG 15の南東隅で1か所のみ確認した。周壁溝は北側の一部に存在する。

また、炭化材が、壁面に張りつく状態と、床面では壁に直交する状態で出土した。埋土は暗灰色シルトである。

SB02 G 16の東半およびG 18の西半で検出した竪穴住居である。直径約5.4mのやや歪な円形である。深さは約35cmである。柱穴や中央土坑は検出していない。周壁溝は、調査した範囲ではすべて確認できた。おそらく全周するものと思われる。埋土は暗灰色シルトである。

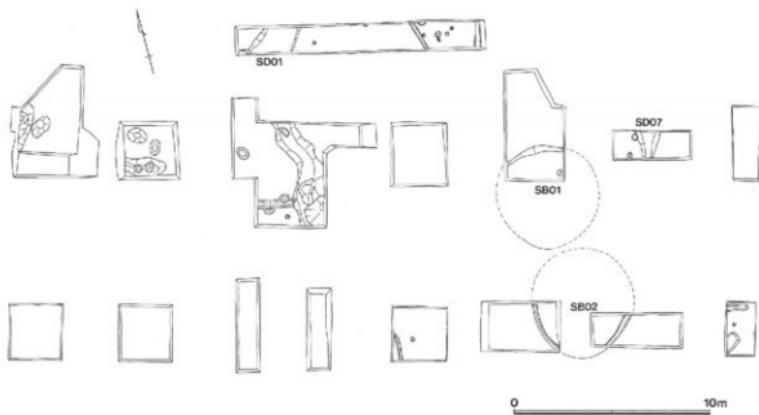


fig. 117 遺構平面図

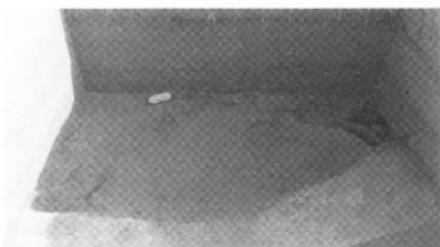


fig. 118
15グリッドSB01

なお、時期は、SB01と切り合い関係はないものの、層位的にSB01より若干古いと考えられる。

SD01 G 9 の西端で検出した、北東から南西方向の溝である。幅は約180cm、深さ約10cmである。この溝は、G 10の南北方向の溝につながるかもしれない。

SD07 G 17で検出した南北方向の溝である。幅約90~130cm、深さ約30cmである。弥生土器の他に、石庵丁が出土した。

その他、G 5で土坑2基、G 9では小穴と溝、G 10では溝と土坑数基などを検出した。

また、G 8において平面では確認できなかったが、断面観察から、竪穴住居状の落ち込みが認められた。

現地表下約160cmで検出した。G 5・10・17などで、ピットや土坑を僅かに検出した。

3.まとめ 今回の調査では、限られた面積にもかかわらず、弥生時代中期の竪穴住居を検出することができた。G 1~3で北西方向に大きく落ち込んでいくが、G 4では弥生時代の遺物包含層と遺構面を確認しているので、ここまででは集落が広がるようである。

遺物についても、弥生土器の他に、石庵丁や原石を含む玉製品、古墳時代の土師器などが出土している。

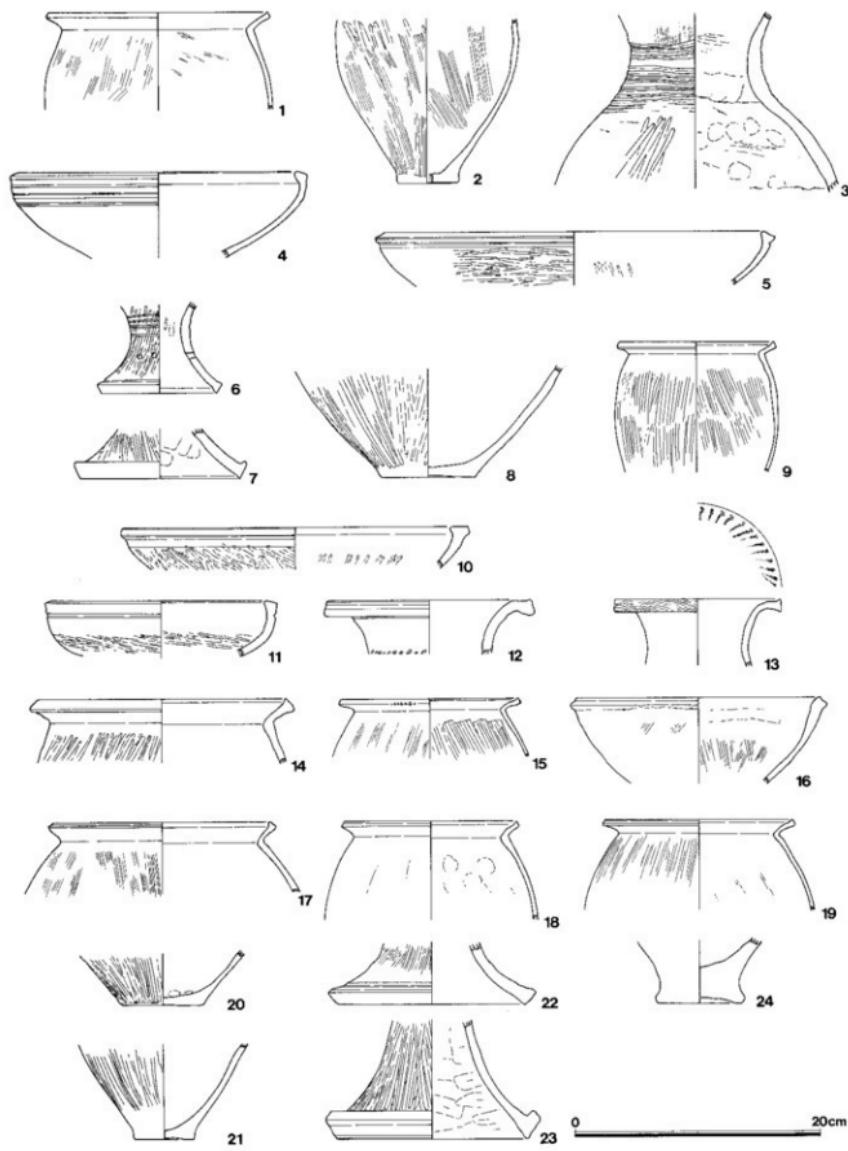


fig.119 出土土器実測図 (1～3 : G 4 4～8 : G 5 9 : G 7 10～23 : G10 24 : G12)

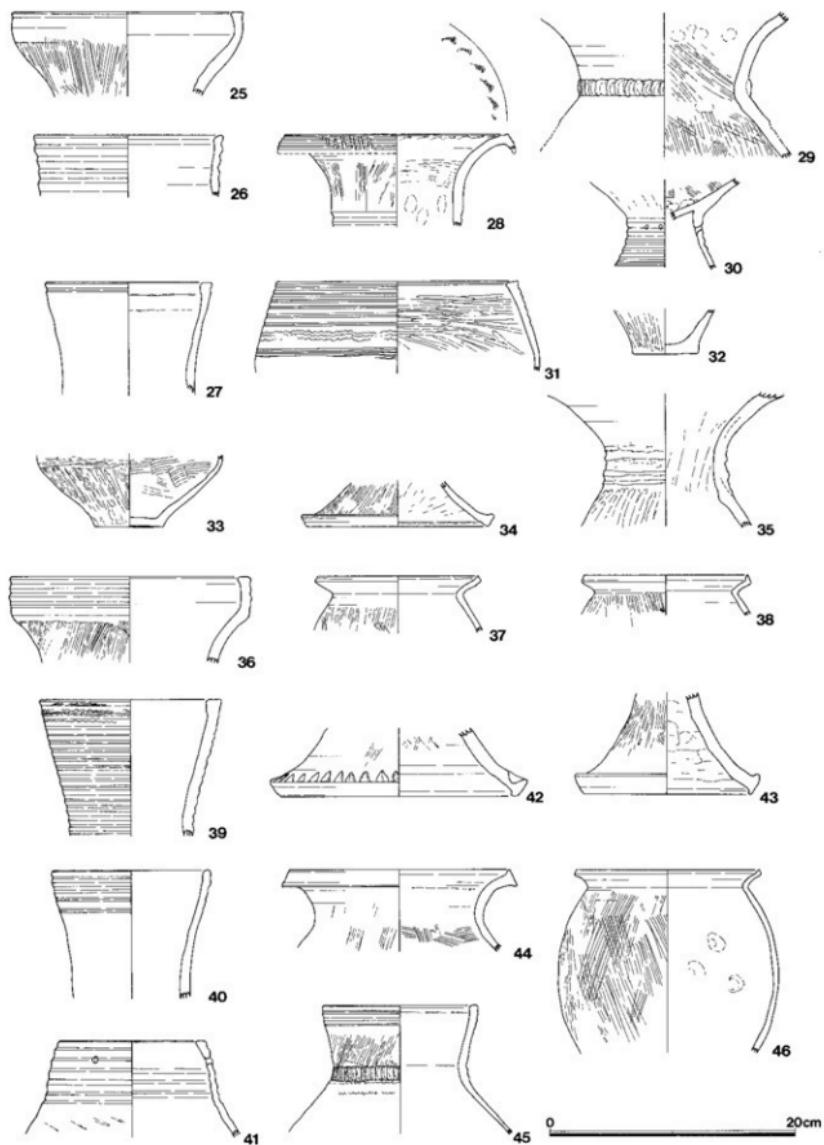
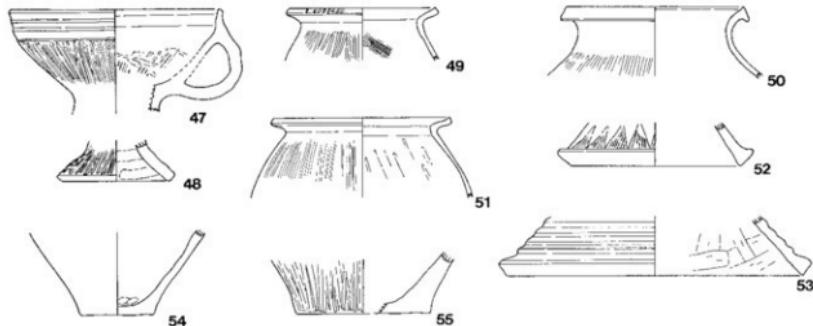
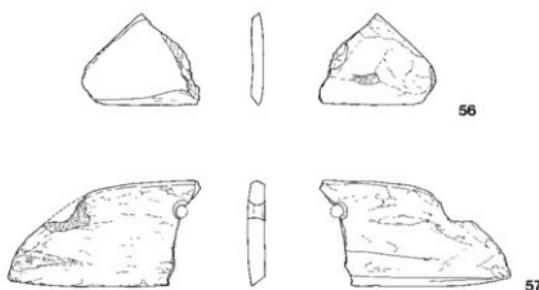


fig. 120 出土土器実測図 (25~32: G14 33~35: G15 36~46: G16)



0 20cm



0 10cm

fig. 121 出土遺物実測図 (47~49 : SB01 50~53 : SB02 54~55 : G18 56 : G17 57 : G4)

19. 柿木遺跡

1. はじめに

柿木遺跡は、明石川の支流櫛谷川中流域左岸の河岸段丘上にひろがる集落遺跡である。遺跡は昭和60年度～平成元年度の柿木地区の土地改良事業及び西神南ニュータウン開発事業に伴う発掘調査で中世の造構を検出し、弥生時代中期後半・古墳時代後期・中世の遺物が出土した。以後、櫛谷町背野・松本両地区の土地改良事業に伴う試掘調査が実施された結果、遺跡の範囲は、西は松本地区から東は柿木地区におよぶ櫛谷川左岸の長さ1,500m、幅100mの規模を有する遺跡であることが判明した。

今回の発掘調査は、菅野地区内での県道小部・明石線道路改良事業予定地で実施した。平成5年度に試掘調査を実施した結果、事業予定地の北側の水田で中世の遺物包含層が確認されたことから、本格的な調査を実施することとなった。調査は、水田畦畔および生活用道路を境にして、当初4地区に分けて実施したが、第Ⅳ調査区で更に南側への遺跡の拡がりが確認された結果、当該区域を第V調査区として調査を実施した。

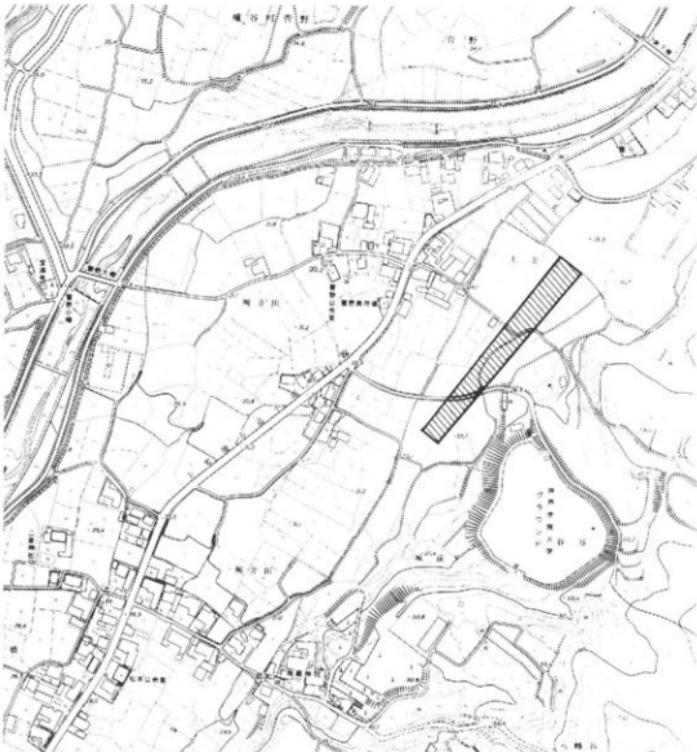


fig.122
調査地点位置図
1 : 5,000

2. 調査の概要

第Ⅰ調査区

調査地域の中央、やや高位の段丘に位置している調査区である。表土下30~70cmで中近世の遺構面を検出した。中近世の遺構面の下には古墳時代の遺物包含層があり、その下層に古墳時代遺構面・弥生時代遺構面が存在していた。

中近世遺構面

中近世遺構面では、近世の河道1か所、ピット列、中世の土坑2か所を検出した。

河 道

幅8m前後、深さ1.4m前後の南東から北西に流れる河道である。河道内の埋土上層から瓦・陶磁器片が出土した。埋土下層からは古墳時代須恵器・弥生時代中期~後期の遺物が出土した。当河道は、近世段階に弥生・古墳時代の遺物包含層を押し流して形成されたと推定される。

ピット

調査区東端の畦畔下で検出した直径20cm前後の小ピット列である。畦畔の土留め杭と考えられる。

SK101

調査区中央の高畦畔下で検出した土坑である。長径1.5m、短径0.9mの梢円形で、深さは12cmを測る。土坑埋土内からは羽釜が出土した。

SK102

調査区東端の高畦畔下で検出した土坑である。長径2.4m、短径1.8mの梢円形で、深さは60cmを測る。土坑埋土内からは遺物の出土はない。

古墳時代

河道の南側で掘立柱建物1棟、北側で掘立柱建物3棟、堅穴住居3棟を検出した。

遺構面

河道の南側で検出した2間×5間の東西棟の掘立柱建物である。南北3.3m、東西7.5m

SH201

の規模があり、柱間距離は梁間で2.25m、桁行で1.9mを計測する。柱掘形は径70cm前後の円形掘形である。

SH202

河道の北側で検出した2間×3間の南北棟の掘立柱建物である。南北5.7m、東西4.5mの規模があり、柱間距離は梁間で1.65m、桁行で1.5mを計測する。柱掘形は径40cm前後の円形掘形である。建物の北西部の柱掘形はSH203の柱掘形によって切られている。

SH203

SH202の東側で検出した2間×5間の東西棟の掘立柱建物である。南北4.7m、東西3.8mの規模があり、柱間距離は梁間で1.9m、桁行で1.5m等間隔を計測する。東柱を持ち柱掘形は径70cm前後の円形掘形である。

SH204

SH202の東側で検出した2間×3間の東西棟の東柱のある掘立柱建物である。南北3.2m、東西9.0mの規模があり、柱間距離は梁間で1.6m、桁行で3.0mを計測する。柱掘形は径70cm前後の円形掘形である。

SB201

調査区東辺に接して検出した方形の堅穴住居である。南北4.5m、東西4.0mの規模を計測する。主柱穴は4か所検出した。主柱穴の間隔は東西柱間距離1.5m、南北柱間距離1.8mを測る。住居の北西隅で浅い貯蔵穴状の落ち込みを検出した。住居の埋土内からは、古式須恵器を含む土師器が出土した。



fig. 123 調査区平面図

- SB202 検査区北西辺で検出したやや台形状の平面形をした堅穴住居である。南北5.2m、東西5.0m以上の規模で、4か所の柱穴を確認したが、主柱穴は明確でない。炉跡・貯蔵穴などの施設は検出できなかった。埋土内からは、土師器と少量の須恵器が出土した。
- SB203 SB202の南東側で検出した方形の堅穴住居である。南北5.5m、東西3.0m以上の規模で、堅穴住居の北東側はSB202に切られる。主柱穴は3か所で確認したが、東西柱間2.0m、南北柱間2.5mの4本柱の建物と考えられる。堅穴住居のほぼ中央に炭を含む炉状のピットを検出した。埋土内からは、土師器片が出土した。
- SK201 SH201の南側で検出した長径70cm、短径50cm前後、深さ15cmの梢円形土坑である。埋土は炭層が間に堆積する。埋土内からは、須恵器・土師器片が出土している。
- SK202 SH201の南桁柱に接して検出された径50cm前後、深さ20cm前後のほぼ円形の土坑である。埋土内からは、土師器壺・須恵器蓋壺が出土した。
- 弥生時代 堅穴住居1棟、溝8条、土坑3か所、方形周溝状遺構1か所を検出した。
- 遺構面 第1調査区の北西部と第2調査区で検出された平面形が長方形の堅穴住居である。東西SB301 8.2m、南北6.2mの規模を計測する。柱穴は8か所検出され、この内の隅柱の間隔は東西4.2m、南北3.9mを測るが、隅柱間にはそれぞれ支柱が検出された。炉跡は堅穴住居の中央南よりに隅丸方形の浅い土坑を掘って設けられている。炉内は、炭層・灰層・砂質土が互層となって充填されていた。出土遺物は、堅穴住居の北東側の床面及び埋土内で弥生土器鉢などが出土した。



fig. 124 第I・II調査区 SB301

- SD301 河道の東側で検出したほぼ東西に流れるU字溝である。溝の西端は近世の河道で切られている。溝は、幅1.0~2.0m、深さ15~30cmを計測する。溝の埋土内からは、庄内式土器・弥生後期の土器が多量に出土した。
- SD302 SD301とSD303を切る南北に流れるU字溝である。幅40cm、深さ10cm前後を計測する。溝の埋土内からは弥生土器細片が出土した。
- SD303 SB301の西辺を開むように周る断面V字状の溝である。溝の東端は袋状にひろがり皿状の土坑様になっている。溝の幅は50cm前後、深さは30cm前後を計測する。溝内からは弥生時代後期末の壺形土器を含む多量の弥生土器が出土した。

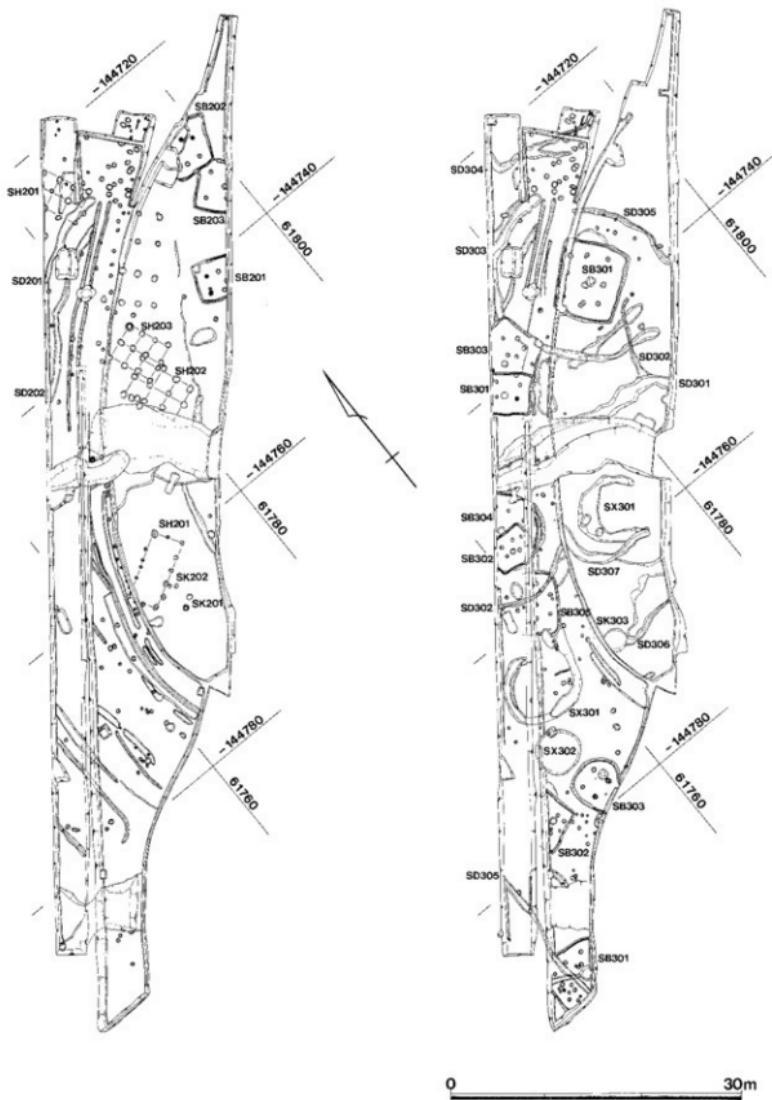


fig.125 第Ⅰ・Ⅱ区調査区遺構平面図（左：弥生～古墳時代 右：弥生時代）

- SD304 SB301の南辺に接する断面V字状の東西の溝状遺構である。溝の両端は、SD303と同様に袋状にひろがり皿状の土坑様になっている。溝の幅は50cm前後、深さは30cm前後を測る。溝内からは、弥生時代後期末の土器が出土している。
- SD305 SB301の東辺を囲むように周る断面V字状の溝である。溝の幅は50cm前後、深さは北側で30cm、南側で10cm前後を計測する。埋土内からは、弥生時代後期末の鉢形土器が出土している。
- SD306 調査区南部で検出した東西の溝である。溝は幅40cm、深さ20cm前後を計測する。砂砾土を埋土としており、自然流路である可能性がある。埋土内からの出土遺物はない。
- SD307 SX301の下層で検出した溝である。溝は幅80cm、深さ40cm前後の規模を計測する。溝中央の溝底で弥生時代中期の長頸壺の完形品が出土している。
- SK301 調査区北部で検出した長1.5m、短径1.0m、深さ5cm前後の長楕円形の土坑である。埋土内からは弥生土器が出土している。
- SK302 SB301の東側で検出した径1.0m、深さ3.0cm前後の浅い円形土坑である。土坑埋土内からは、弥生土器細片が出土した。
- SK303 SD306を切る径2.0m、深さ15cm前後の断面皿状の円形土坑である。出土遺物は検出されなかった。
- SK301 河道の南側で「コ」字状に周る溝である。東側は後世の削平にあって欠失していて、本来方形であったと考えられる。溝の幅は1.5~1.0m、深さは30~50cmを計測する。弥生土器が隅部で集中して出土した。
- 第II調査区 第I調査区の西側下段の水田であるが、今回の調査は、道路予定地の西側における菅野地区土地改良事業地と接する幅3.0m、長さ80mの水路敷設部分と第I調査区検出のSB301が継続すると推定される部分に限って実施した。調査の結果、古墳時代後期以降の遺構面と弥生時代後期から古墳時代前期の遺構面を検出した。
- 古墳時代後期
以降の遺構面 第I調査区から継続する近世の河道と古墳時代後期の掘立柱建物1棟、溝2条、柱穴27か所と調査区南端で谷状の落ち込みを検出した。この他、近現代の水田耕作に関わる溝などを検出した。
- 河 道 調査区中央で検出した第I調査区から継続する自然流路である。幅3.5~3.0mで、第I調査区で検出した河道より幅が狭い。深さは1.2mを計測する。河道の埋土内からは、古式土器や流木などが出土した。
- SH201 調査区の北西辺に接して検出した、2間×3間以上の東西棟の掘立柱建物である。南北3.5m、東西6.0m以上の規模があり、東柱を備えている。柱間は、梁間で1.5m等間、桁行で2.1mの間隔をとっている。柱掘形は、径70cm前後の円形掘形である。柱掘形内の埋土から土器片が出土している。
- SD201 調査区西より中央に平行して掘られた溝である。幅60~90cm、深さは10~30cmを計測する。埋土内からは、弥生土器片・土師器片・須恵器片が出土している。
- 柱穴群 第I調査区と接する調査区東辺で柱穴群を検出したが、第I調査区のSB304に継続する柱穴は検出されなかった。
- 谷状地形 調査区南端の耕作土直下で谷状の地形を検出した。砂砾と粘土が互層に堆積しており、

遺物等は発見されなかった。近世以後に谷が埋没した形跡と考えられる。

古墳時代前期～
弥生時代中期
の遺構面

調査区北部では古墳時代後期の遺構面である褐色砂を除去すると、直下で遺構面を検出したが、河道より南側では古墳時代前期以前の遺物包含層が分厚く堆積しており、下層の遺構面は緩やかに傾斜している。検出した遺構は、竪穴住居4棟、溝1条、円形周溝状遺構1か所を検出した。

SB301 調査区中央北よりトレンチ西辺に接して検出した長方形の竪穴住居である。南北4.5m、東西4.0m以上の規模がある。主柱穴は4か所検出し、東西の柱間2.2m、南北柱間1.6mを計測する。竪穴住居内のやや西よりに一辺60cm前後の隅丸方形の炉状のビットを検出した。また、住居東辺の中央に取りつく炭と灰で埋まった煙道状の溝を検出した。煙道状の溝は、住居東辺沿いにL字形に巡っていた。

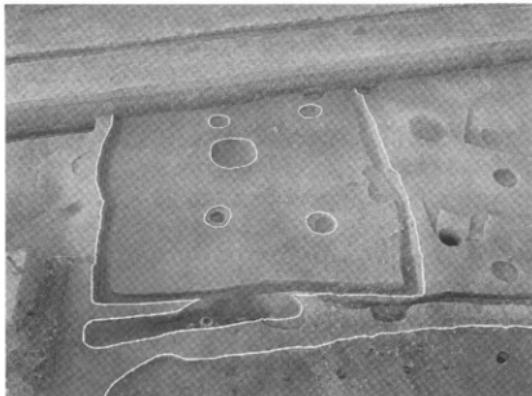


fig. 126 第II調査区 SB301

SB302 河道の南側で検出した長方形の竪穴住居である。南北4.0m、東西5.0mの規模がある。主柱穴は4か所検出し、東西1.6m、南北1.4mの柱間を計測する。住居中央南よりに径50cm前後の円形をした炉状のビットを検出した。出土遺物は、埋土内及び壁溝内から土師器・弥生土器が出土している。

SB303 SB301の西側で検出した竪穴住居で、一辺4.9mの正五角形の平面形を呈する。主柱穴は、各隅部に対応して4か所で検出した。主柱穴の各柱間は2.5m等間を計測する。住居床面の東・南辺沿いでは、床部が10cm前後高く貼られベッド状となっていたが、住居床面の全周には貼ってはいない。竪穴住居の中央で直径60cm、深さ20cm前後のL字状のビットを検出した。出土遺物は埋土及び周壁溝内から弥生土器・土師器片が出土した。

SB304 河道の南側、SB302の下層で検出した円形の竪穴住居である。規模は直径11.5mある。検出した主柱穴は3か所、中央でロート状の断面をした炉跡と考えられるビットが検出された。出土遺物は埋土内から弥生土器が多量に出土した。

SD301 河道の北側に接して検出した第I調査区のSD301に継続する溝である。幅は1.1m、深さは40cm前後を計測する。溝内からは、多量の土師器片と弥生土器片が出土した。

- SD302 SB304の南西側で検出した断面V字状の溝である。溝の幅は40cm、深さは25cm前後を計測する。溝内の埋土からは、弥生土器片が出土した。
- SD303 SB303のベッド状遺構下層で検出した溝で、第Ⅰ調査区のSD303に継続する。この溝はトレンチ西壁付近で屈曲してトレンチの北東方向に伸びている。溝の断面形はU字状になっていて、幅は50~90cm、深さは30~50cmを計測する。第Ⅰ調査区のSB301の周囲を区画する溝と考えられる。埋土からは、多量の弥生土器が出土した。
- SD304 調査区北部で検出した「く」字状に屈曲する断面U字形の溝である。溝の幅は50~80cm、深さ20cm前後を計測する。溝内の埋土は砂礫で、出土遺物は弥生土器片が出土した。
- SD305 調査区南部で検出した幅60cm、深さ10cm前後の南北溝である。溝内からは、弥生土器片が出土した。
- SX301 調査区南部の傾斜面で検出した円形周溝状遺構である。溝の幅は80cm前後、深さ20cmを計測する。周溝の北側で、弥生時代中期の壺形土器が完形品で出土した。
- 第Ⅲ調査区** 第Ⅲ調査区は、生活用道路をはさんで第Ⅰ・Ⅱ両調査区の北隣の水田に設定した。掘削土置場の関係から、調査区の中央で南北2か所に分割して調査を実施し、北側を第Ⅲ-1区、南側を第Ⅲ-2区とした。調査の結果、中近世の遺構面と中世～弥生時代の遺構面を確認したが、調査期間の関係から第Ⅲ-2区の第2遺構面である中世～弥生時代の遺構面は、第Ⅱ調査区と同様に道路予定地西辺の苦野地区土地改良事業地と接する幅3m、長さ40mの水路敷設部分に限って実施した。また中世～弥生時代の遺構面は、第Ⅰ・Ⅱ両調査区で確認した古墳時代と弥生時代の遺構が同一面で検出される状態と考えられる。
- 中近世遺構面** 遺構の密度は比較的低く、遺跡の縁辺部であると思われる。その中でも遺構が集中している部分が数か所あり、とりわけ遺跡の中心部分と考えられる第Ⅰ・Ⅱ両調査区に近い第Ⅲ-2区南半の部分は遺構を多く検出した。具体的には畦畔下の溝状の地業2条、杭列、土坑2基、土師器小皿埋納ビット1基、柱穴等がある。
- SD101 調査区内にあった水田の畦畔のはば直下で検出した溝状の地業である。第Ⅲ-2区南端のみ畦畔の西側にずれている。幅は一定せず、0.4~2.2mと場所によってばらつきがあるが、0.7m前後の部分が多い。深さは10~30cmと浅い。染付磁器片が出土しており、現在の水田区画がはば確定した当時のものであろう。
- SD102 SD101が第Ⅲ-2区南端で畦畔の西側にずれている部分の、畦畔の直下で検出した溝状の地業で、幅0.3~0.5m、深さ約20cmである。両者の位置関係から、SD102はSD101より新しく、畦畔は東側へ約2.5m動いていることが判る。
- 杭列 SD101に沿って検出した直径20cm前後的小ビット列である。SD101の幅が広い場所では重複して検出した。杭の先端が遺存しているビットもある。畦畔の土留め用の杭と考えられる。
- SK101 第Ⅲ-1区南東部分の、SD101底面で検出した土坑である。平面は卵形で、長径1.1m、短径0.8m、深さ約40cmである。土坑の側面は平面の輪郭よりえぐれている部分もあった。埋土は砂と砂礫で、水が溜められていたと思われる。
- SK102 第Ⅲ-1区東部分で、SD101に切り込まれている状態で検出した土坑である。平面は長楕円形で、長径3.8m、短径0.7m、深さ約20cmである。

- SP101 第III-1区南東部分で検出した土師器の小皿を10枚収納したビットである。平面は直径0.3mの円形で、深さ約20cmである。ビットの中央に小皿を重ね、小皿とビットの側面との隙間にも小皿を詰め込むようにして埋めていた。小皿の大半は完形であったが、破片も少量あった。小皿以外には遺物は出土せず、ビットの性格は不明である。
- ビット群 第III-1区北半、第III-1区南半～第III-2区北半、第III-2区南半の各部分でビット群を検出した。平面は円形あるいは楕円形で、直径20～60cm、深さ10～20cmのものが多いが、第III-1区南半～第III-2区北半、第III-2区南半のビットの中には深さ40～50cmで、柱痕の明確なもの、根石を持つもの、柱根が遺存するものもあった。しかし、いずれの柱穴も建物を構成するようにはまとまらなかった。他にも削平されて消滅した柱穴があり、現状では建物と判定できないのか、柱穴1基あるいは数基で構成される簡易な構造物であったのか、どちらかの可能性を考えられる。
- 中世～弥生時代
- 遺構面 第III-1区では上層の中近世遺構面ほどではないが、この面も遺構密度は比較的低い。
- SD201 第III-1区北端で検出した溝で、北側の溝肩は調査区外になり未検出である。幅は2.3m以上、深さ約30cmである。中世の土師器片、須恵器片、木製品、流木が出土した。埋土は灰色系の砂や粘土で、水が流れていることが推定できること、SD201のほぼ真上にも現在の用水路が流れていることから当時の水田の用水路であった可能性が考えられる。
- SD202 SD201の南側に平行して検出した溝で、幅約20cm、深さ約10cm、北肩とSD201南肩との間隔は1.4～1.8mである。池状遺構SG201で一部が壊されている。中世の須恵器片が出土した。遺構の性格は不明であるが、SD201に伴うものであろう。
- SD203 第III-1区南東部分で検出した溝である。調査区外東方へ続いているが、西方は後世の削平を受けて消滅しており、長さ2.5m分を確認した。幅60～80cm、深さ約10cmである。中世の土師器片、須恵器片が出土した。
- SD204 第III-1区南東隅で検出した溝である。SD203同様調査区外東方へ続いているが、西方は後世の削平を受けて消滅しており、長さ5.1m分を確認した。幅50～80cm、深さ約20cmである。中世の土師器片、須恵器片が出土した。
- SD205 第III-2区中央で検出した溝で、幅1.2～1.5m、深さ約20cmである。遺物は出土しなかったため、時期は不明である。底の部分のみの埋土は灰色粘土で、水の流れが推定できるが、大半の埋土は砂質土と粘土が混在しており、人为的に埋められたと思われる。
- SD206 第III-2区南部分で検出した溝で、幅0.5～1.4m、深さ約20cmである。底には直径5～10cm、深さ5cm前後の小さい窪みを多数確認した。北側でSX201に流れ込んでいる。弥生土器片が多數出土した。
- SD207 第III-2区南部分で検出した溝である。幅1.4～1.5mであるが、確認した東端の部分で急に0.7mに細くなっている。深さは約20cmである。弥生土器片が多數出土した。
- SG201 第III-1区北西部分で検出した池状遺構である。平面形は整っておらず、東西4.4m南

北4.2mの規模である。北側でSD201に繋がっている。中世の須恵器片、木製品と、大量の伐採された木の枝、木の葉、木の根が出土した。SD201・202との埋土観察によると、SD202が理積後、SD201に繋がる状態で開削されたが、しばらくして周囲に生えていた木を伐採し、その枝や葉ごと埋め立てたことが判明する。また、埋め立ての際にはSD201を残した状態で池状遺構のみを埋め立てている。遺構の性格としては用水路から水を汲み上げる場所であったと考えられる。



fig.127 第Ⅲ調査区 SG201

SE201 第Ⅲ-2区中央南寄りで検出した井戸である。SD206理積後に掘り込まれている。井戸枠としては直径40cm、高さ20cmの曲物を3段積み重ねていたが、上段の曲物は高さ5cm程度しか残っていなかった。また曲物より上部の構造は確認できなかった。掘形は曲物より少し大きい程度で、直径約50cm、深さ約50cmである。遺物は枠内から上段の曲物が崩れ落ちたものと、磨滅した弥生土器の細片が数点出土したのみで、井戸の時期を示すものはなく、不明である。

SX201 第Ⅲ-2区中央で検出した遺構で、SD206が流れ込んでいる。平面形は整っておらず、東側西側共に調査区外へ続いており、大きさは不明である。底には溝状に窪んでいる部分もあり、その部分の埋土は暗灰色系の粘土で、水が淀んでいた可能性がある。弥生土器片が多数出土し、中には完形に近い高杯や、甕もあった。遺構の一部分のみを調査した状況であるため、遺構の性格はよく判らない。

ピット群 第Ⅲ-1区SG201周辺、SD203・204周辺でピット群を検出した。平面は円形あるいは梢円形で、直径20~70cm、深さ10~30cmのものが多い。建物を構成するようにはまとまらなかった。

土坑群 第Ⅲ-1区中央で土坑群を検出した。平面は円形、梢円形、卵形で、直径0.6~1.4m、深さ20~60cmのものが多い。

小溝群 第Ⅲ-2区SX201周辺で小溝群を検出した。幅20~30cm、深さはすべて5cm前後である。遺構の性格は中世頃の耕作による小溝群の可能性がある。

第IV調査区 第IV調査区は、第I・II両調査区の南隣の水田3面で設定した。調査の結果、古墳時代と弥生時代の2つの遺構面を確認した。

また、第I調査区で確認した中近世の遺構面の継続部分を確認したが、現在の水田の段差とは異なる方向の段差以外、目立った遺構は検出されなかった。

古墳時代遺構面 調査区の西端を除くほぼ全域で遺構を検出した。具体的には溝2条、土坑3基、ピット等がある。

SD201 調査区の中央で検出した溝である。幅は0.2~1.5mと定まってはいないが、北寄りの部分で一度途切れ、南方ほど幅が大きくなる傾向にある。深さも10~20cmであるが、南方ほど深くなる傾向にある。南東側隣接地で実施した、農政局の苔野地区土地改良事業に伴う発掘調査区に続いている。古墳時代の土師器片、須恵器片が出土した。

SD202 SD201の東側で平行して検出した溝である。これも幅は0.2~1.6mと定まってはいないが、SD201とは逆に中央から南寄りの部分で二度途切れ、北方ほど幅が大きくなる傾向にある。深さも10~20cmであるが、北方ほど深くなる傾向にある。古墳時代の土師器片、須恵器片が出土した。

SK201 調査区の中央北西寄りで検出した土坑である。平面は梢円形で、長径70cm、短径50cm、深さ約20cmである。埋土は茶褐色土で、古墳時代の土師器片、須恵器片が出土した。

SK202 調査区の中央西寄りで検出した土坑である。平面は円形で、直径60cm、深さ約20cmである。埋土は茶褐色土と淡灰色砂礫で、古墳時代の土師器片、須恵器片が出土した。

SK203 調査区の南部分で検出した土坑である。平面は円形で、直径80cm、深さ約30cmである。埋土は茶褐色土で、古墳時代の土師器片、須恵器片が出土した。

**ピット
土坑群** 調査区の東半でピット・土坑群を検出した。平面は円形あるいは梢円形で、直径20~80cm、深さ10~40cmのものが多い。埋土はいずれも淡褐色灰色系の砂礫やシルトで、建物を構成するようにはまとまらなかった。

弥生時代遺構面 調査区のほぼ全域で遺構を検出した。具体的には竪穴住居1棟、掘立柱建物1棟、土坑3基、落ち込み3か所、ピット等がある。

SB301 調査区の北端で検出した円形の竪穴住居である。全体の一部分を確認したのみで、復元



fig. 128 第IV・V調査区遺構平面図

径約9mとなる。柱穴は2か所検出し、間隔は5.5mである。ただ、住居全体での柱の本数は不明である。住居の埋土からは弥生土器の壺、高杯が出土した。

SH301 調査区の南端で検出した掘立柱建物で、SK303埋積後に建てられている。桁行6間×梁間3間で、棟通り方向は北で約60度東へ振っている。大きさは桁行7.8m、梁間5.9m、柱の心々間距離は梁間で1.9~2.3m、桁行で0.9~1.5mである。柱掘形は直径50cm前後の円形あるいは梢円形である。柱穴のなかには柱根が遺存しているものもあった。柱根の下端は斜めに材を切断した上、焼き焦がして強度を高めていた。東平入側の柱穴2基は、南東側隣接地で実施した農政局の菅野地区土地改良事業に伴う発掘調査区で検出し、南妻側の桁行2間は、調査の進行上第V調査区で検出した。

SK301 調査区の西側部分で検出した土坑である。平面は隅丸方形で、3.2×3.6m、深さ約40cmである。埋土は上部が茶褐色系の土、下部が灰色系の土で、弥生土器片が多数と、柱状片刃石斧の先端部分が出土した。

SK302 調査区の北西端で検出した土坑で、調査区外北方へと続いている。平面は円形で、直径1.2m、深さ約10cmである。完形の壺を含む弥生土器片が出土した。

SK303 調査区南方拡張区の西端で検出した土坑である。平面は卵形で、長径2.8m、短径1.8m、深さ約20cmである。弥生土器片が出土した。

SX301 調査区の東部分で検出した浅い落ち込みである。平面は不整形で、大きさ5.0m以上、深さ約10cmである。調査区外北方と、一部分は南東側隣接地で実施した、農政局の菅野地区土地改良事業に伴う発掘調査区に続いている。

SX302 調査区の中央東寄りで検出した浅い落ち込みである。平面は不整形で、大きさ4.2m、深さ約5cmである。

SX303 調査区の北東端で検出した浅い落ち込みである。平面は不整形で、大きさ2.0m以上、深さ約15cmである。調査区外北方と、一部分は南東側隣接地で実施した、農政局の菅野地区土地改良事業に伴う発掘調査区に続いている。

第V調査区 第V調査区は、第IV調査区の南側に連続する水田4面で設定したが、第IV調査区を一部南方へ拡張して調査したため、北東部分は第IV調査区が第V調査区内に張り出す形状となる。調査の結果、古墳時代～弥生時代の遺構面を確認した。これは第I・II両調査区で確認した古墳時代と弥生時代の遺構が同一面で検出される状態と考えられる。また、第I調査区で確認した中近世の遺構面の継続部分を確認したが、第IV調査区同様現在の水田の段差とは異なる方向の段差以外、目立った遺構は検出されなかった。

古墳～弥生時代 遺構面 調査区のはば全域で遺構を検出したが、南方に進むにつれて遺構の密度は低くなる。具体的には掘立柱建物2棟、掘立柱塀1条、溝4条、ピット、土坑等がある。

SH301 第IV調査区で検出した掘立柱建物の、南妻側の桁行2間分である。

SH302 調査区の中央で検出した掘立柱建物で、SD302の埋積後に建てられている。桁行3間×梁間2間で、棟通り方向は北で約30度東へ振っている。大きさは桁行4.8m、梁間4.2mで、柱の心々間距離は梁間で1.9~2.1m、桁行で1.4~1.9mである。柱掘形は直径50cm前後の円形である。

SA301 調査区の東端で検出した掘立柱塀で、東側隣接地で実施した農政局の菅野地区土地改良

事業に伴う発掘調査区に続いている。柱間は2間分を確認し、方向は北で約70度東へ振っている。長さは7m以上、柱の心々間距離は1.6mと2.7mである。柱掘形は直径50cm前後の円形あるいは楕円形である。

- SD301 調査区の西半で検出した溝である。第IV調査区のSK301から南東方向へ流れ出している。北東端は幅1.5m前後、深さ約20cm、その他の部分は幅2.0m前後、深さ30~40cmである。中央の部分は溝の底が二段になっている。埋土の観察によると、流水が認められるが、比較的ゆるやかであったと思われる。弥生土器の細片が出土した。遺構の性格は集落からの排水路であると考えられる。
- SD302 調査区の中央で検出した溝である。北東から南東へと流れている。幅は0.7~2.3mと定まってはいないが、北側は狭く南側ほど大きくなる傾向にある。深さも10~60cmであるが、北側は浅く南側ほど深くなる傾向にある。埋土の観察によると、SD301とは少し異なり、堆積当初の流水は幾分急であったと思われる。弥生土器片が出土した。遺構の性格は、SD301同様集落からの排水路であると考えられる。
- SD303 調査区の中央北寄りで検出した浅い溝で、幅30~40cm、深さ約5cmである。SH301の棟通り方向と直行するため、SH301と同時期の可能性がある。
- SD304 調査区の中央で検出した屈曲する溝で、幅0.6~1.0m、深さ約30cmである。
- ピット 調査区の南端と北端でピット・土坑群を検出した。平面は円形あるいは楕円形で、直径土坑群 0.3~1.2m、深さ10~40cmのものが多い。いずれも建物を構成するようにはまとまらなかった。

3. まとめ

今回の調査で中近世・古墳時代・弥生時代の合計3面の遺構面と、主なものとして掘立柱建物7棟・掘立柱塀1条・竪穴住居9棟の他、方形周溝状遺構1基・円形周溝状遺構1基・池状遺構1基・井戸1基・河道1条の遺構を検出した。朽木遺跡では今まで古墳時代と弥生時代の遺物は確認されていたが、遺構を確認したのは今回が最初である。

今回の調査区は、神戸学院大学グランドの北側の谷筋から西方へ広がる小扇状地の扇央から扇端にかけての部分と、小扇状地の北側に続く低位段丘上に設定したことになるが、確認した集落の中心は、第I調査区と第II調査区を設定した小扇状地の扇央部分にあることが判明した。そこから第IV・V調査区を設定した小扇状地の扇端部分、第III調査区を設定した低位段丘上へと進むにつれ遺構の密度が徐々に低くなり、集落の縁辺部分となっていく。朽木遺跡の範囲は今回の調査地のさらに南北へ続いており、今回確認した集落自体は当該地内で一旦収束するものの、別の集落が隣接して存在するものと考えられる。

朽木遺跡の立地条件は、巨視的に見れば櫛谷川左岸の低位段丘上であるが、微視的に見れば長さ1kmを越える当遺跡は小河川や小谷状地形でいくつかの部分に区分することができ、段丘上や扇状地上に広がる小規模な集落が、櫛谷川に沿って連続していた状況が復元できる。これまでの調査では面積が小さかったこともあり、遺跡の実体がよく判らなかつたが、今回の調査で遺跡の様相がある程度解明できたと思われる。

すがの 20. 菅野遺跡

1. はじめに

菅野遺跡は明石川の支流である樋谷川中流域の西側河岸段丘上に立地し、平成6年度当初に試掘調査が行われ、弥生時代～中世の複合遺跡であることが明らかになった。

今回の調査は土地改良事業に伴う農道及び排水路の敷設部分で、古墳時代後期～近世の遺構、弥生時代中期～近世の遺物が確認された。



fig. 129
調査地点位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

調査は便宜上、1～7区の調査区を設定し、さらに地区によっては小区割を行った。以下、地区ごとに概要を記す。また、1～6区については伝菅野城の城域内とされる区域である。

1 区 7～8世紀の遺構が検出された。時期の判明した遺構はSK01とSD01で、それぞれ7世紀後半、8世紀後半に比定される。

1-a区の落ち込みは、伝菅野城の堀跡と推定されている場所であるが、埋土（上層・下層）中の遺物から、近世のものと判断されたため、城の堀とは考え難い。

2 区 現況面の直下に厚さ約1mの盛土が施されており、この盛土中より近世の遺物が確認されたため、伝菅野城造成時のものとは考え難く、耕作地造成時のものと断定した。

盛土の下は深い谷状遺構となっており、この谷状遺構の南側肩部と中洲部分で溝状遺構（SD03他）などが検出されたが、詳細な時期は不明である。

谷状構造 2-b区を中心に、3、4、6区に及んで確認された北西～南東方向にはしる谷状構造で、最も深い場所でG L-3.2mを測る。埋土は大きく上層、中層、下層、最下層に分けることができ、それぞれ10世紀～13世紀前半、8世紀後半～10世紀、6世紀後半～8世紀後半、弥生時代中期後半～6世紀後半の遺物が出土した。また、中層、下層、最下層より木製品、木質遺物が多く出土しており、曲物、鳥形木製品、杭状木製品、柄状木製品などの製品が確認されている。



fig. 130 曲物出土狀況



fig. 131 柄状木製品出土状況

- 3 区 谷状遺構の東側肩部が確認された程度である。

2 区と同様に耕作地造成時の盛土が存在し、3-a 区が厚く、約 1~1.5m を測る。

4 区 谷状遺構の中にあたる地区である。この谷状遺構の上には 2・3 区でみられる耕作地造成時の盛土が存在し、今回の調査区内で最も厚く施されており、約 2m を測る。

5 区 現況で 1~3 区より一段高い位置にあたり、段差が約 2m である。

2~4 区で確認された近世の盛土がほぼ全域に存在し、西端部で盛土の下層に奈良~平安時代の匂合層が確認された。この匂合層もしくは盛土の

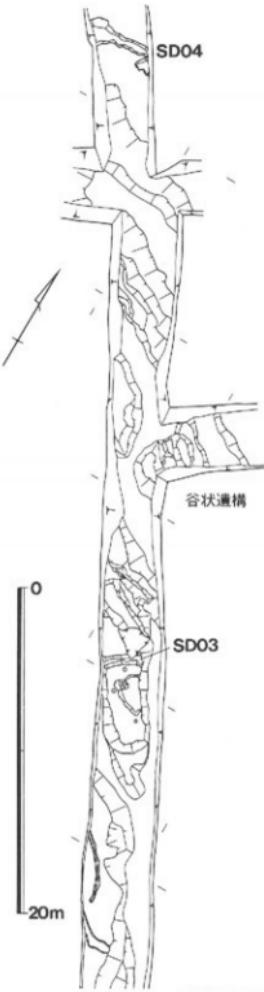


fig. 132 2~4区遺構平面図

直下は地山面で、これが遺構面にあたる。

遺構は小規模なピットが數か所と中央部にやや大規模な溝状遺構（SD05）が検出された程度である。SD05からは近世の遺物が出土した。また、ピットからは小細片の遺物しか出土しなかったため、時期は不明である。

- 6 区 2面の遺構面が確認された地区で、2～5区と同様の盛土の上面が第1遺構面、盛土の下層上面（地山面）が第2遺構面となる。

第1遺構面では時期不明の溝が1条検出された他、北端部で落ち込みが確認された。この落ち込みは伝菅野城の堀跡と推定されている箇所であるが、近世盛土を堀り込んで造られているため、堀跡とは考え難い。

第2遺構面では8世紀後半の溝（SD04）等が検出された程度である。

- 7 区 1～6区より南西に約100m離れた所に位置する。7-a区では厚さ約10cmの盛土の下が地山面となっており、地山面では遺構は検出されなかった。

7-b区は7-a区の東端から南に向けて延びる調査区で、6世紀後半～中世の遺構が検出された。7-b区の北半部と東側拡張区は耕土直下で遺構面（地山面）となるが、7-b区の中央部より南側と西側拡張区は耕土・盛土の下に8世紀後半の遺物包含層が存在し、その下層上面（地山面）が遺構面となる。また、7-c区は厚さ約1～1.5mの盛土の下に時期不詳の遺物包含層が存在し、その下層上面で遺構が検出された。

7区で検出された遺構は、概ね6世紀後半、7世紀後半、8世紀後半、中世の時期に区分できる。

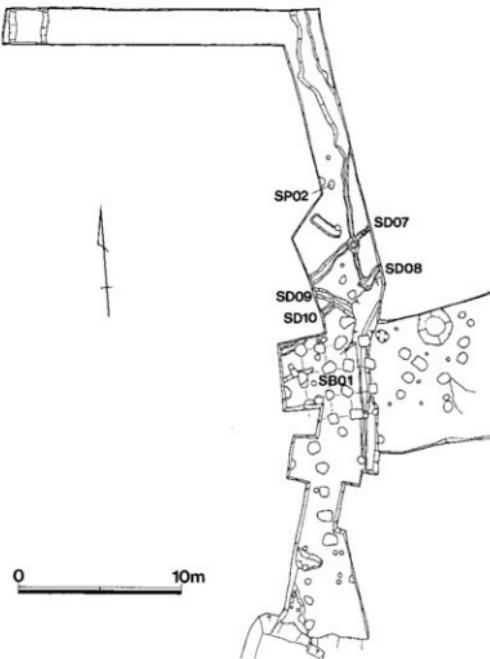


fig. 133 7区遺構平面図

SB01 7-b 区と西側拡張区で検出された 3×3 間の掘立柱建物で、柱穴から出土した遺物から 7 世紀後半の築造と考えられる。

この建物の柱穴間隔は約 1.4~1.5m で、柱穴は直径約 40~80cm、深さ約 30~50cm を測る。

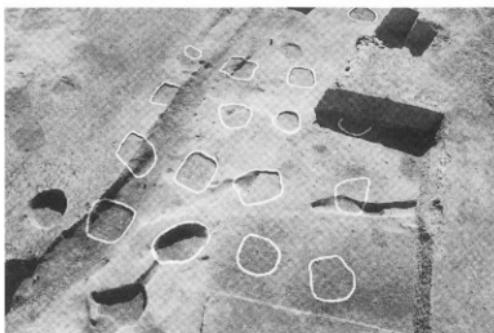


fig. 134 7 区 SB01

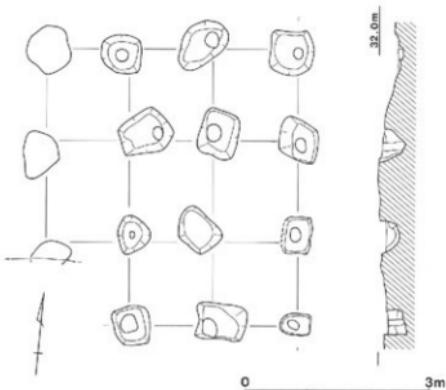


fig. 135
SB01 平・断面図

SD07~10 7-b 区の SB01 の北側で検出された溝で、幅が約 50cm、深さが平均約 20cm を測る。溝内より 6 世紀後半と考えられる遺物が出土した。

その他、8 世紀後半のものとしては SP02、中世のものとしては SX03 などがある。

3.まとめ

今回の調査の成果としては、まず、6 世紀後半~8 世紀後半の遺構が数多く検出され、同時期の集落遺跡の一端を確認できたことが挙げられる。また、2-b 区とその周辺地区で確認された谷状遺構から、6 世紀後半以前（弥生時代中期後半あるいは古墳時代前期）の遺物が大量に出土したことは、近隣地域における同時期の集落遺跡の存在を示唆するものである。

その他、伝菅野城の城域内とされる区域（1~6 区）については、中世城郭に関わる遺構が確認されなかった。同区域が伝菅野城の一部であるとは、現在のところ考え難い。

如意寺三重塔遺跡

1. はじめに

権谷は、明石川の支流権谷川によって形成された沖積低地と、大阪層群の一部をなす明石累層によって形成された丘陵が広がる地域である。如意寺は、権谷川支流の谷口川により形成された小谷に存在する。この谷口川の北岸に位置し、丘陵端部の尾根間に建立された寺院である。

如意寺の伽藍は、小谷の谷合を造成して建立されている。コ字状の平坦面中央に本堂を置き、左右に阿弥陀堂と三重塔を配置している。一段下がった平坦面を挟み、より一段下がった平坦面に文殊堂が配置される。現在確認できる主要伽藍はこの三段の平坦面に形成されている。より下方で谷口川の周囲に広がる段丘上には、中世後期で24院の塔頭等が存在したと推定されている。

他の天台寺院では太山寺と同様の伽藍配置であり、天台伽藍の一典型を成している。

如意寺の創建については『播磨明石之保比金山如意寺旧記』に大化元年（645年）に法道上人の開基との記事がある。

信憑性のある記録では仁平2年（1152年）に権谷を本尊の敷地として領主から寄進された記事があり、弘安5年（1282年）に「地頭領家より寄進あり諸堂修營」との記事がある。また14世紀に入ると、至徳13年（1385年）三重塔再建の記録が龍車銘に確認される。15世紀には文殊堂も建立し、現在確認できる如意寺の伽藍配置が完成している。

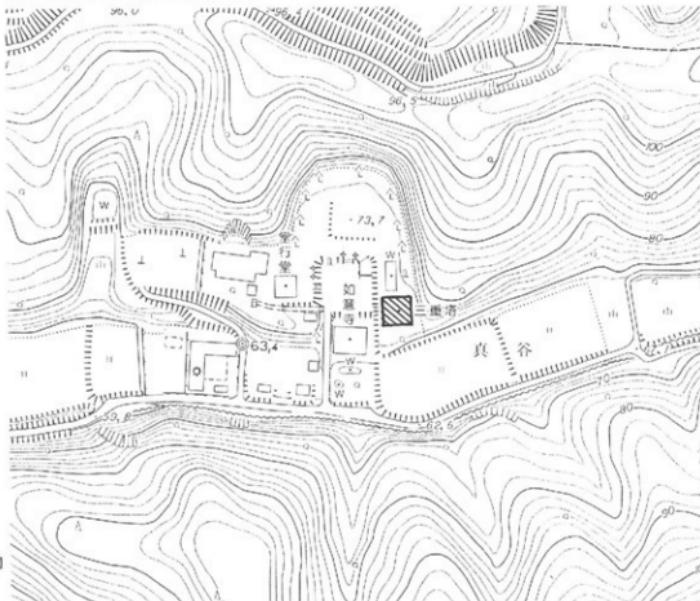


fig. 136
調査地点位置図
1 : 2,500

近年、埋蔵文化財調査も幾度か実施され、以上の文献等に認められる記録を追認し、補完する資料が確認されつつある。

如意寺の南面で東西に延びる小谷の調査では、塔頭の推定位置（実相坊、福聚院、東禪坊、妙音坊、宝幢坊、一乘院、慈持坊）から、13世紀後半～14世紀の柱穴群、石敷遺構、池状落ち込み、井戸等が確認されている。また18世紀を中心とする遺構も合わせて確認されている。

文殊堂の南西に広がる平坦面の調査では、15～16世紀頃と推定されている瓦窯跡と14世紀以前に建立された基壇建物が確認されている。基壇は文殊堂の西南約30mに位置し、単成基壇である。礎石は遺存しないが、東西3間以上×南北3間と理解されている。基壇の周囲から瓦の出土がなく、瓦葺き以外の建物であった可能性が考えられている。

本堂では基壇の南面にトレーナーを設定して、調査が実施されている。その結果、現況基壇は17世紀中頃～18世紀中頃以降に築造された事実が明らかになった。本堂は天保11年（1840年）に焼失後、幕末に再建されている。この再建時に現況の7間×7間の基壇として改築された可能性が高い。

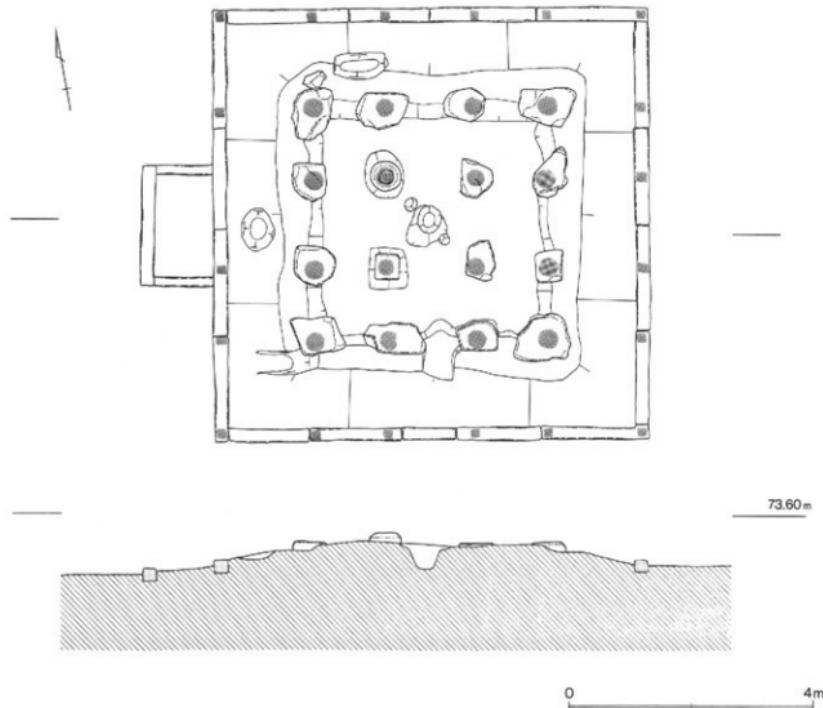


fig. 137 現況基壇平・断面図

三重塔は中軸線がずれる事実から、本堂・常行堂より遅れて整備されたと考えられている。また、龍車銘の写しに至徳13年（1385年）三重塔再建の記録があり、その建立年代だとされている。

近世に三重塔の修理が行われた記録も存在し、概要は下記の通りである。

元和5年（1619）九輪を改鋲 旧記 龍車銘

文政13年（1830）伏露盤、請花を改鋲 伏鉢銘

天保2年（1831）三重塔修理 風鐸銘

2. 調査の概要

今回の調査は平成6年度から始められた三重塔修理事業の一環として実施した。調査目的には三重塔の創建に伴う基壇の確認と、三重塔が建立されたと推定される至徳13年以前に存在した可能性のある建築物の確認がある。

ただし、東西方向の断ち割りを除いて基本的に基壇本体は現状保存とし、基壇の上面で確認できる遺構だけを調査している。

調査の主体は基壇の肩部分から外側で実施している。4本のトレンチと基壇の北東角を含む約1/4の調査区を設定した。

調査の概要是以下の通りである。

第1遺構面 近世で、ほぼ延べ石縁を持つ基壇が築造される時期以降の遺構面である。基壇の周囲から排水路が検出されている。

第2遺構面 現況基壇より遡る基壇として、二成基壇（上層基壇）が検出された。近世で、ほぼ延べ石縁の基壇が築造される時期までの遺構面である。

第3遺構面 二成基壇（下層基壇）と、雨落ち溝（SD301・302）が検出された。室町時代以降で近世に至る遺構面である。

第4遺構面 二成基壇の縁東回り部分を除去した下面から、祭祀に伴うピット等が検出された。出土した須恵器楕から13世紀初頭～前半までの遺構だと考えられる。

（基壇断ち割り） 基壇本体に東西方向へトレントを設定し、調査した。版築土から、おそらく13世紀前半と予想できる軒丸瓦が出土している。

延べ石縁基壇と 基壇の縁は延べ石で区画されており、近世の修理により改築されたと想定されている。

基壇上面の遺構 延べ石を設置するために幅約70～80cm、深さ約20～35cmの溝を掘削し、それ以前の基壇に伴う縁東石は抜き取られている。

延べ石の下面には石列が確認されている。位置的には延べ石の継ぎ目に置かれており、延べ石の設置時にその固定を目的として置かれた石であろう。

基壇の中央には幅約40cm、深さ約38cmを測る円形の落ち込みがあり、極めて柔軟な灰褐色細砂が堆積している。遺物は含まれていないが、埋土の状態から後世の極めて新しい時期に掘削された遺構であろう。この周囲には幅約20cm、深さ約55cmをはかるピットが2か所で確認された。ピットの底部からは近世の平瓦が出土している。

現況基壇の基壇高は約55cm、基壇幅は約7.1mである。基壇の上面は礎石のラインから内側に再び約10cm高くなる。断ち割りの断面で確認すると、後後に上面を貼り直したために基壇が盛り上がった状況が認められる。

礎石は西側の2か所が石塔婆からの転用である。このうち北西角の礎石には、元禄14年

(1701年) の銘文が確認されている。

この転用された礎石は現況基壇の上面から掘形が確認され、細砂～中砂で埋設されている。他の礎石は上面を貼り直した化粧土で覆われているが、可能な範囲で確認すると周囲は割栗石で固められている。ただし転用された礎石では、掘形の下面からも割栗石は確認されていない。この2か所は創建時に礎石が存在しなかったと考えられているが、それを基壇の版築状況からも窺うことができた。

基壇断ち割り 基壇の中央に幅約30cmのトレーナーを設定し、東西方向に断ち割りをいた。版築状況を確認する限りでは、基壇本体の下層から時期を遡る基壇は確認できない。ただし基壇の表面は礎石のラインから内側が盛り上がり、貼り直した土層が存在する。

基壇の版築土からは須恵器片と共に、13世紀代の巴文軒丸瓦が小片で出土している。

また基壇より下層であるW-31層から、須恵器楕の口縁部が出土している。小片であり細かな時期は判断できないが、12～13世紀前半の可能性が考えられる遺物である。

第4遺構面 下層基壇の裾部分を除去した下面で、下層基壇を築造する以前の遺構が確認された。下層基壇の東回り部分で、版築土の下面から検出した遺構であり、第3遺構面と区別している。遺構は浅いピットが大半であり、壁面の焼土化や炭化物の堆積が確認される。祭祀に伴う遺構であろう。SP403の出土遺物から13世紀初頭～前半の遺構であることが理解できる。

下層基壇で裾部分の版築土から、おそらく中世後期と予想できる瓦片が出土している。

SP401 基壇の北東角で検出された。径約26×42cm、深さ約8cmを測る不整円形のピットである。遺物は出土していない。埋土に炭化物は含まず壁面の焼土化も確認されない。SP402・403とは性格の異なる遺構である。

SP402 径約20×28cm、深さ約4cmを測る不整円形のピットである。埋土はすべて炭化物であり、壁面に焦土化が確認できる。他に遺物は出土していない。

SP403 径約21×30cm、深さ約5cmを測る不整円形のピットである。ピットの底部に半分に割れた須恵器楕が置かれており、楕内には炭化物が堆積している。

浅く掘り込んだピットに楕を設置し、楕の上面で火を燃らせた状況が確認できる。

楕の時期は13世紀初頭～前半である。

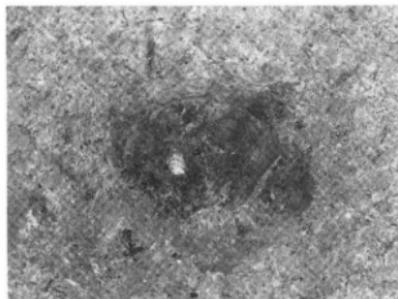


fig. 138 SP403

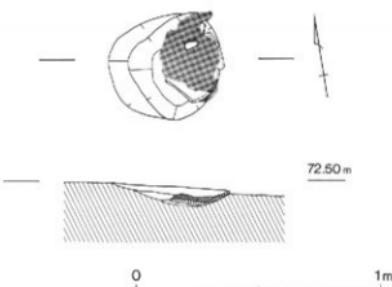


fig. 139 SP403平・断面図

SX401 幅約22cm以上×52cm、深さ約8cmを測る長方形に近い楕円形の落ち込みである。土坑だと思われるが、西側を近世の延べ石縁の掘形で削平されており、明らかではない。少量の炭化物と共に、須恵器碗・土師器皿等が細片で出土している。

第3造構面 二成基壇の築造に始まり17~18世紀代に至る遺構面である。下層基壇とそれに伴う雨落ち溝や排水路が確認された。

4トレーナーの調査では、現状保存の関係から側溝で下層基壇を確認しただけである。

SD301 幅約58~72cm、深さ約20~35cmを測り、基壇に沿って東西方向に延びる溝である。雨落ち溝の推定ライン上にあり、雨落ち溝を兼用する排水溝であろう。

上層では多量の瓦と共に白磁碗や土師皿が出土している。これらの遺物は溝の廃棄時に投棄された可能性が高い。瓦は中世に属するものが圧倒的に多い。他に白磁碗、土師器皿が出土している。これらの遺物から、溝の廃棄時期は17~18世紀代の可能性が考えられる。また底部上面からは、鎌倉時代の軒平瓦が出土している。SD301よりも古く、如意寺の創建時に近い資料である。

SD302 幅約24~41cm、深さ約3~8cmを測る南北方向の雨落ち溝である。浅い落ち込み状に検出された。本来は東西方向にも延びていたが、SD301に削平されたと考えられる。

溝内とその周囲から、中世瓦が多く出土している。出土した瓦は、軒丸瓦の小片1点を除けば近世以降だと判断できる資料は出土していない。周囲の埋没した時期は近世に入っていた可能性が高いが、主体となる時期は室町時代であろう。

下層基壇 基壇の基底部で東西約8.1m×南北約7.6m、亀腹部分で東西約5.6m×南北約5.2m、基壇高約76cmを測る二成基壇である。SD301・302が雨落ち溝となる。

基壇裾部分の版築土からは中世の瓦片が出土しているが、その細かな時期は不明である。ただし下層基壇の基底部はSD302と同一造構面から確認され、室町時代の瓦を多く含む堆積層はその上面を覆っている。中世に版築された基壇であろうが、細かな築造時期は判断できない。

SP301 径約16cm、深さ約3cmを測るピットである。炭化物が堆積しており、SP402・403とは基本的に同じ性格を持つ造構であろう。ただしSP402・403は下層基壇の下面から検出されており、出土遺物も合わせて考えると二成基壇造営以前の造構であることは確実である。SP301は炭以外の遺物が出土せず、基壇外での検出であるため、時期が押さえられない。

第4造構面に対応する時期の造構である可能性も持つ。

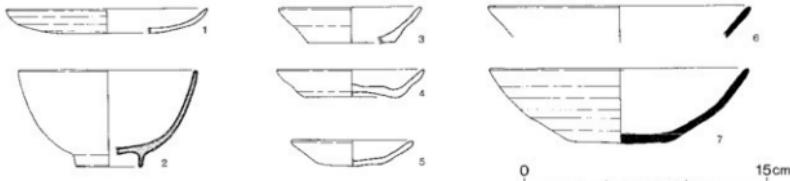


fig.140 出土土器実測図 (1~5: SD301 6: 斷ち割り 7: SP403)
(1・3・5: 土器 2: 陶器 6・7: 須恵器)

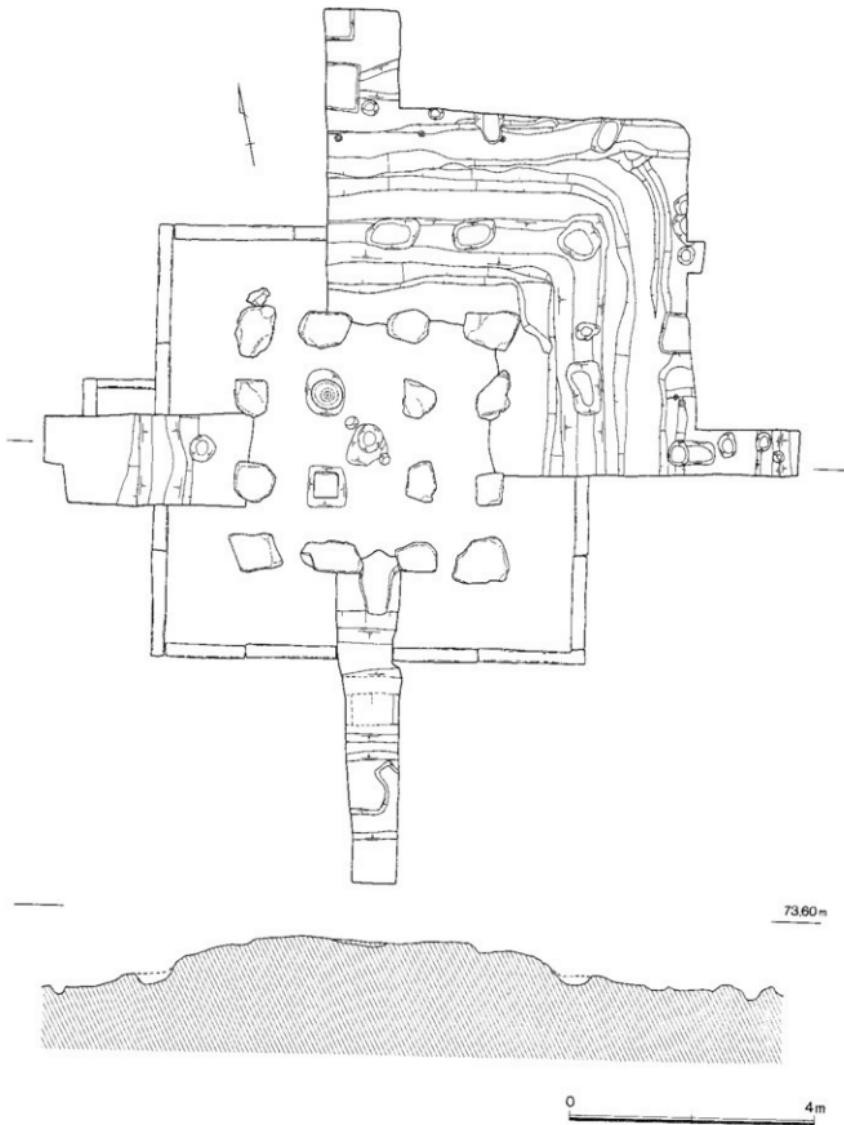


fig. 141 第3造構面平・断面図



fig. 142 SD301

第2遺構面 上層基壇とそれに伴う雨落ち溝が検出された。また基壇の周囲からは近世以降の修理に伴う足場を設定した柱穴も確認されている。

上層基壇 基底部で東西約8.5m×南北約9.1m、基壇高約52cmを測る二成基壇である。基本的に下層基壇を継承して裾部分を高く盛り上げただけであり、基壇の亀腹部分の幅は下層と同一である。土砂の堆積による基壇周囲の埋没に対応して、新たに版築したのだろう。

亀腹は東面の依存状況は良好だが、西面は崩落している。

雨落ち溝は推定ラインで浅い溝が検出されている。

上層基壇はSD301の廃棄後にその上面から版築されている。ただし版築土から出土した軒平瓦を見る限りではSD301との時期差は認められない。大きな時期差はないと考えられる。

柱穴 径約26~36cmを測る円形の柱穴と径約40cm×74cmを測る梢円形の柱穴がある。すべて雨落ち溝の外側から検出されており、17世紀以降の修理による足場等の設置に伴う遺構であろう。

第1遺構面 江戸時代で、ほぼ延べ石縁の基壇が築造される時期の遺構面であろう。

雨落ち溝とも考えられる浅い溝の他、基壇の周囲から他にも基壇と平行する溝が確認されている。位置的に雨落ち溝より外側で確認されており、塔の東側に接する丘陵斜面から流入する雨水の排水溝であろう。

SD101 1トレンチの北端で検出した。幅約70cm、深さ約15cmを測り、南北方向に延びる溝である。溝内から江戸時代以降の軒平瓦等が出土している。

SD102 1トレンチの北端で、SD102に接した北側で検出した。幅約32cm以上、深さ約20cm以上をはかり、南北方向に延びる溝である。江戸時代以降の平瓦等が出土している。

SD103 3トレンチで検出した。幅約70cm、深さ約15cmを測り、東西方向に延びている。溝内から江戸時代以降の平瓦等が出土している。

- SD104 拡張区で検出した。幅約36cm、深さ約5cmを測り、東西方向に延びている。雨落ち溝のラインに位置している。
- SD105 4トレンチで検出した。幅約44cm、深さ約6cmを測り、東西方向に延びている。雨落ち溝のラインに位置している。

3.まとめ

如意寺の境内は丘陵端部の斜面を造成して平坦部を造成している。三重塔も、北から南へ傾斜する斜面を削平して平坦部を造成したことが明らかになった。ただし平坦部の北側では、整地層らしい浅い土層も確認されている。

基壇について現況の延べ石縁を周囲に巡らせる以前は、二成基壇であることが確認された。延べ石の石掘形からは、近世後半の瓦が出土している。風鐸銘に天保2年（1831）三重塔修理の記録があり、延べ石縁の築造時期だと推定されているが、ほぼそれに対応させることは可能である。

検出された二成基壇は、版築土の上層から近世前半の軒丸瓦が出土しており、SD301の埋没後に築造された事実と合わせて、ほぼ17~18世紀に構築されたと理解できる（上層基壇）。ただし基壇の基底部は第3造構面から築造されている。また基壇の周囲で、室町時代以降の中世瓦を多数出土した第3造構面直上の堆積層が、基底部付近の上面を覆うことも確認されている。二成基壇は江戸時代に修築を受けるが、築造は中世に遡ると推定できる（下層基壇）。ただし、下層基壇が三重塔の創建時期にまで逆上るかは疑問が残る。基壇本体の版築土では13世紀前半頃の軒丸瓦が出土しており、縁東回り部分の版築土から出土した遺物とは時期差が認められる。二成基壇の版築される以前に単成基壇が存在していた可能性も存在する。

この二成基壇の縁東石は、延べ石縁の造成時に抜き取られているらしい。延べ石縁の下面に石列が存在するが、石の上面は上層基壇内に埋没している。下層基壇には対応できるが、石を据え付ける為に近世後半の瓦も使用されており、時期的に一致しない。破壊された石や、縁東石としては小さすぎる石も存在する。現況基壇の礎石から推定する縁東石の位置とずれる石も多く、延べ石縁の縫ぎ目と対応している。基本的に延べ石縁の設置に伴い、その固定のために据え付けた石であろう。

この二成基壇の下面から、さらに遺構が検出されている。縁東回り部分の版築土を除去した下面から、壁面が焼上化し炭化物が堆積したピットが2基検出された。その1基は須恵器碗の破片を底部に据え、その上面に炭化物が堆積した状態で出土している。ピット内で火を燃らせたと考えられ、何らかの祭祀に伴う遺構であろう。祭祀の行われた時期は、須恵器碗の時期から13世紀初頭~前半頃だと推定できる。

調査結果では、基壇下面の浅い整地層から出土した須恵器碗の小片は12~13世紀前半頃と予想され、平坦地で行われた祭祀も13世紀初頭~前半頃である。また基壇本体の版築土からは、13世紀前半頃の巴文軒平瓦が出土している。

文献では『日記』に至徳13年（1385年）三重塔再建の記事があり、その創建年代だと推定されている。

出土遺物からは、塔の建立に先立ち平坦地が造成された時期が12~13世紀前半頃であり、基壇の版築された時期は13世紀前半以降であることは理解できる。

いんじ 22. 印路遺跡 第4次調査

1. はじめに

当調査地は、印路遺跡の北端に位置する。印路遺跡については、昭和63年度以降、数次にわたる調査が実施されている。その結果、旧石器時代～中近世に至るまでの遺構、遺物が確認されて、複合遺跡であることが判明してきた。

平成4年度、当地において圃場整備の計画がなされた。このため試掘調査を実施したところ、一部において埋蔵文化財の存在が確認され、従来周知されていた印路遺跡がさらに北方へ広がることが明らかになった。

今回の調査は、道路改良工事に伴うもので、一部生活道路として使用されている部分を除き、埋蔵文化財の存在する部分すべてを対象とした。



fig. 143
調査地点位置図
1 : 2,500

2. 調査の概要

調査地は北から南へと緩やかに傾斜しており比高差は、約1m程度である。基本層序は耕土、旧耕土、床土、北部においては赤褐色粘土、南部においてはさらに中世～古代の土器を含む灰黄色粘質土、灰褐色土を挟んで淡黄灰色シルト～粘質土の地山面となる。

遺構は、調査区の中央部から南よりを中心に掘立柱建物3棟、溝、土坑、自然流路、ピットなどが検出された。

以下、主要な遺構について、略述する。

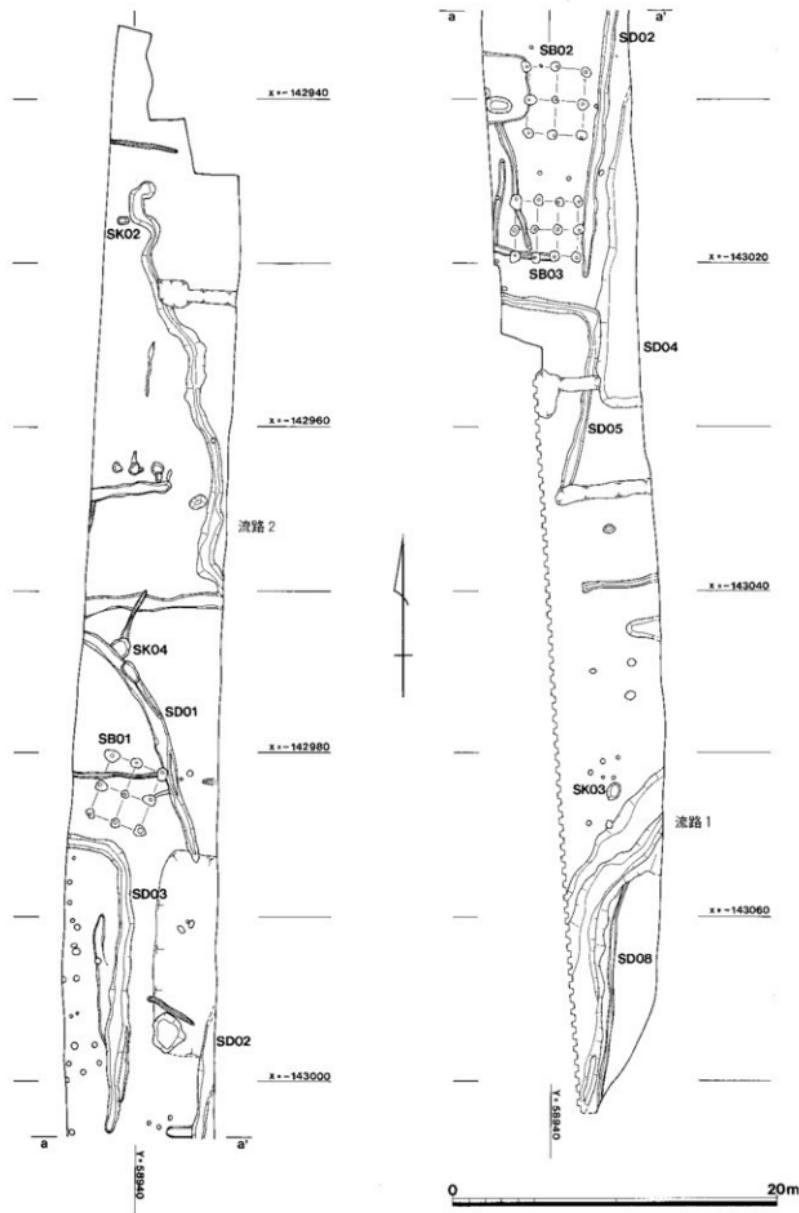


fig. 144 造構平面図

SB01 調査区北部において検出された 2×2 間の総柱の掘立柱建物である。一辺40~50cmの崩れた隅丸方形の掘形（ピット1~9）になる。

柱間は、南北2.0m、東西1.6mである。また、建物の主軸の方向は、SB02・03とはや違える。

掘形は、およそ30~40cmの深さをもち、柱痕はピット1・2・6において明瞭である。

SB02 調査区中央部において検出された 2×2 間、総柱の掘立柱建物である。一辺40~50cmの隅丸方形の掘形になる。

柱間は、南北2.0m、東西1.8mである。およそ40cmの深さの柱掘形であったが、中央のピット25だけは25cmとやや小さい。また南東隅のピット29では、明瞭な柱痕跡と版築がみられた。

SB03 SB02の南側に、ほぼ同方向で検出された南北2間×東西3間の掘立柱建物である。

柱間は、南北1.6m、東西1.3mと他の2つの建物に比べてやや狭い。

柱掘形の壁は直に立ち上がるものが多い。深さは、ほとんどのもので40~60cmを測るが、中央のピット36・37は浅く造られている。

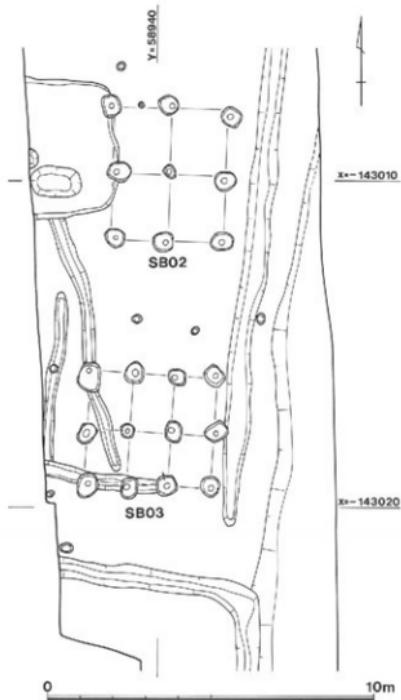


fig. 145 SB02・03平面図



fig. 146 調査区北半全景

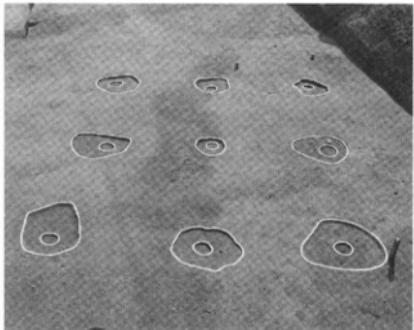


fig. 147 SB01

- SD01 調査区の北部を北西から南東へ流れる溝で、幅40cm、深さ10cmを測る。南側ほど削平を受けているため、遺構の残りが悪い。SB01に先行する。
- SD02 調査区の東端を北から南へ流れる溝で、幅50cm、深さ30cmである。切り合いからSB03に先行することがわかる。
- SD03 調査区中央部において検出された溝幅80cm、深さ30cmを測る。西側が調査区外へ拡がることと、南側の削平が著しいため、不確定であるが「L」ないし「コ」字状の、区画溝と考えられる。遺存の良い部分では、内側に急で、外側に緩い肩部をもつようである。
西壁沿いに集中する20~30cmのピット群は、この区画の内側に存在する建物になる可能性がある。
- SD04 SD02の東側をほぼ同じ方向に流れる溝である。東肩は、調査区外へ広がる。
- SD05 調査区中央~南部にかけて検出された「L」字状の溝である。幅70cm、深さ20cmを測る。南側は、削平を受け、痕跡をとどめるのみである。
- SD08 調査区南部において、流路2の東側を、ほぼ並行して流れる溝である。幅20cm、深さ最大20cmを測る。
- SK02 調査区北端において検出された長軸70cm、短軸40cmの、梢円~隅丸方形にちかいプランをもつ土坑である。
- SK03 調査区南部において検出された長軸1.0m、短軸0.4mの梢円形の土坑である。埋土に炭が多く混じり、壁にも一部赤変がみられた。
- SK04 調査区中央部において検出された、梢円形の浅い土坑である。北半部をSD01に切られている。
- 流路1 調査区南部を南北に緩く蛇行しながら流れる自然流路である。何度も流れを変えながら存在したようであるが、遺物が認められたのは、最終の流れと思われるもののみである。幅1m以上、深さ80cmを測る。
- 流路2 調査区北部において検出された幅50~60cm、深さ40cmほどの流路である。埋土は、粘土と粗砂の互層で、下層の砂より著しく磨滅を受けた赤生土器が少量出土した。調査区の北へ延びていたためトレンチを拡張して検出した結果、5mほど先で深い溜まり状になって途切れていることが分かった。
- 断割り調査 調査終了に際して、調査区内3か所に断ち割りトレントを設定し、重機により掘削をおこない下層の状況について断面観察をした。
いずれのトレントにおいても砂、粘土、シルトが互層に堆積し遺物等は検出されなかった。
- 出土遺物 現在整理途中であるが、概して遺構内からの出土量は少ない。時期は古墳時代後期~飛鳥時代にかけてのものが比較的多い。
- 3.まとめ 今回の調査においては、遺跡の縁辺部にもかかわらず、まとまった遺構が検出された。特に、3棟確認された柱の掘立柱建物は、7世紀前後の倉庫と考えられ注目に値する。これらが、単独で存在しているとは考えにくく、周辺に居住区などが存在するものと思われる。

23. 小山遺跡 第2次調査

1. はじめに

小山遺跡の調査は、神戸市西区玉津町小山地区の土地区画整理事業に伴うもので、平成5年度から全面発掘調査を実施している。昨年度の調査では、弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての堅穴住居や多くの溝等の遺構が見つかり、この遺跡が明石川左岸の河岸段丘上に営まれた集落遺跡であることが判明し、良好な遺跡の残存状況が明らかとなった。今年度の調査は、そうした調査を継続して行うもので、昨年度と同様に、遺跡の推定範囲内についての事業計画道路部分の全面発掘調査を実施した。

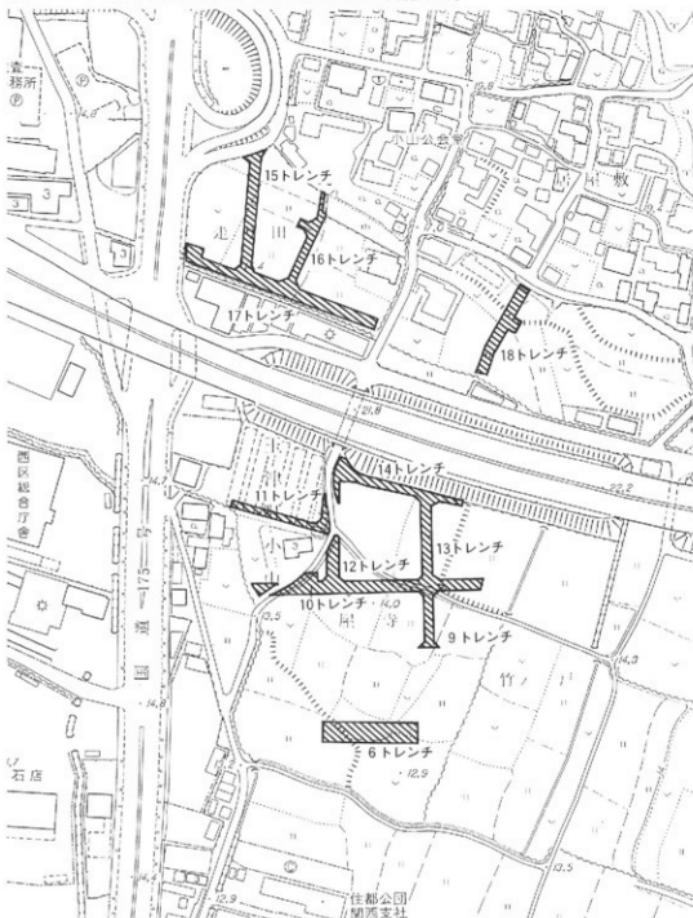


fig. 148
調査地点位置図
1 : 2,500

- 2. 調査の概要** 昨年度の全面調査で、試掘調査時に推定していた遺跡の範囲が拡がることが判明したために、遺跡範囲の拡がる部分について昨年度調査区を拡げて調査を行った。その為、昨年の調査部分を第6トレンチ1区とし、今回新たに調査した部分を便宜上2区と3区に分けた。
- 2 区** 2区の調査区は、南端で遺構面が緩やかに傾斜し、東端は地形が低く傾斜している。検出された遺構は土坑1基、ピット2基で、時期は不明である。
- 3 区** 1・2区の西側に位置し、現代水田が一段低く落ちている下の水田で、旧耕作土を掘削すると、黄白色シルト質の遺構面でピットが5基検出されたのみであった。ピットの掘形はいずれも方形で、掘形そのものの残存状況は悪く、わずかにピットの底部分が検出できたというものであった。柱根は掘形よりもわずかに深く入っていた。ピットは4基が一列に並ぶが、建物を構成したもののか、横列様のものであるのか不明である。方形の掘形を持つピットは当遺跡では他に無いものである。いずれのピットからも出土遺物は無く、時期は不明である。
- 第9トレンチ** 第8トレンチの北側に位置する南北に延びるトレンチで、第8トレンチとの交点付近で土坑を5基検出した。いずれも出土遺物は無く時期は不明であるが、埋土の状況が第8トレンチで弥生時代前期の壺が出土したSK01と似ていることから、同時期の土坑であると思われる。
- SD01** トレンチを斜めに横切るSD01は幅1.3m、深さ21cmの溝で、多くの土器が出土した。出土遺物から、溝の時期は弥生時代後期と考えられる。
- 第10トレンチ** 第9トレンチに続く東西に延びるトレンチで、座標軸を利用して6区に分け、トレンチの東端から順に1区、2区とし、トレンチの西端で現道路に分断された西側を6区とした。トレンチの東端は溜池として土地利用がなされていた為に、既に遺構は削平されている。この第10トレンチからは、円形竪穴住居3基、土坑26基、溝4条に加えて数十基のピットを検出した。
- SB01** 2区で検出した円形竪穴住居で、その一部が調査区外に延びているために、トレンチを一部拡張して、竪穴住居の全容を明らかにする調査を行った。その結果、竪穴住居の直径6.8m、主柱穴が4本で、周壁溝がほぼ全周するものであることがわかった。また、中央土坑の周囲は粘土で丸く囲まれていた。出土遺物から判断して弥生時代後期の竪穴住居であると思われる。
- SB02** SB01のすぐ北側で検出された円形竪穴住居である。その約半分が調査区外に延びているが、調査の制約上、全容を明らかにすることは出来なかった。竪穴住居は周壁溝が円形に巡るが、削平のために竪穴住居の壁は無く、主柱穴も確認出来ず、中央土坑も調査区外に存在するものと思われる。時期判断の決め手となる遺物の出土は無いが、SB01と同時期のものと思われる。
- SB03** 5区で検出した円形竪穴住居で、その一部が調査区外に存在するために、調査区を拡張して、その全容を明らかにした。SB03は直径8.9mの大型の円形竪穴住居で、周壁溝がほぼ全周し、主柱穴は6本であった。中央土坑は方形に近く、深さ90cmと深く、その側には対を成してピットが検出された。床面では完形の甕や高杯などが出土し、出土遺物から、

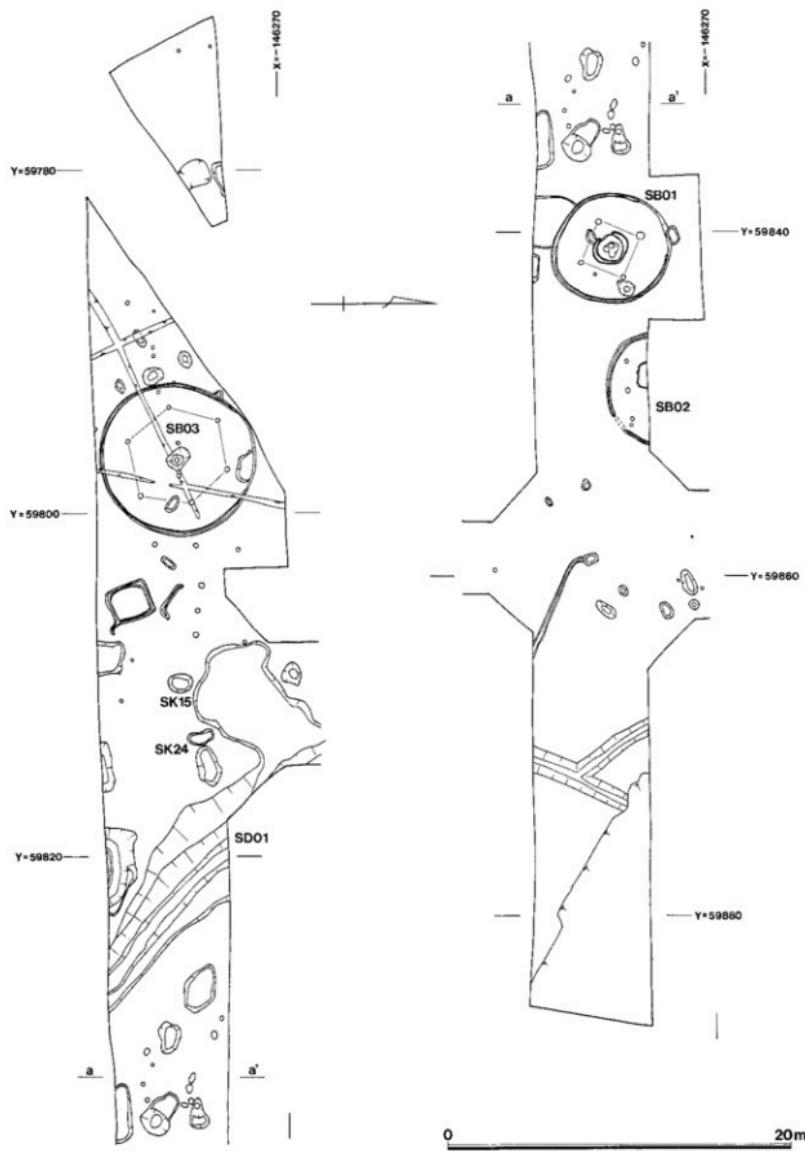


fig. 149 第10トレンチ造構平面図

竪穴住居の時期は弥生時代後期と考えられる。

SK15 長径1.4m、短径1.1m、深さ21cmの楕円形の土坑で、多くの弥生時代後期の土器が出土した。

SK24 長径1.6m、短径80cm、深さ10cmの不定型の土坑で、数個体の土器が出土している。時期は弥生時代後期と思われる。

SD01 最大幅が5mに達し、深さは42cmの溝である。溝は北西から南東方向に続く、平坦部と傾斜部を繰り返して底に達している。茶褐色シルト質土層の埋土には拳大の礫を含み、多量の土器片が含まれていた。

第11トレント
第10トレントの北側に位置するトレントで、トレントの大部分はビニールハウス建設時に削平されている。検出された遺構は土坑5基、溝8条、ピット十数基である。

SK01 トレントの北東で検出されたが、調査区外に遺構が延びるために、その規模を明らかには出来なかった。弥生時代後期の土器がまとまって出土し、手造り型土器が出土している。

SD03 幅1.5m、深さ47cmの溝で、北西から南東方向に続く。多くの弥生時代後期の土器が出土した。

SD05 幅60cm前後、深さ28cmの溝である。トレントに沿うように検出された溝は、トレントの東南端部で直角に屈曲している。反対側にあたるトレントの西北部は、現代の水田が一段落ちて、削平されているために、この溝がどのように延びるかは明らかでは無いが、同じように直角に屈曲し、方形に巡り、敷地の境界を表す溝であった可能性が考えられる。そして、この溝の掘削された方向は、条里地割りの方向に一致する。また、SD05からは完形の須恵器椀や縁輪碗の底部が出土している。出土遺物からこの溝の時期は12世紀と考えられる。

第12トレント 第10トレントに続く北側の調査区で、土坑2基、溝2条、ピット数基を検出した。

SD01 幅2.2m、深さ56cmの溝で、北西から南東方向に流れる。溝からは大量の土器が出土した。第10トレントとの交点付近では、溝本流が溢れて形成されたと思われる10cm前後の浅い広がりを検出した。出土遺物からこの溝の時期は、弥生時代後期であると考えられる。

SD02 長さ4.8m、幅22cm、深さ12cmの溝で、土師器椀の底部が出土した。溝の時期は12世紀と考えられ、溝の方向は条里地割りの方向に一致する。

第13トレント 第10トレントの北側に続く調査区である。土坑9基、溝3条、ピット十数基を検出した。

SK07 長径2.6m、短径90cm、深さ23cmの土坑で、完形品を含む多くの土器が出土した。出土土器から、弥生時代後期の土坑と考えられる。

SD01 幅1.2m、深さ25cmの溝で、北西方向から南東方向に、13トレントを斜めに横切って流れれる。弥生時代後期の溝であると思われる。

第14トレント 第13トレントの北側に続くトレントで、竪穴住居1基、土坑16基、溝10条、ピット数十基を検出した。

SB01 一辺8.8mの方形竪穴住居で、一部が調査区外に延びるもの、ほぼ全容を知ることが出来る。周囲には高床部を持ち、床面からは中央土坑と柱穴3基、土坑1基を検出した。竪穴住居の一辺の中央部は僅かに外側に張り出している。また、高床部は地山を掘り込んだ床面に盛土を施して構築されているもので、10cm内外の低いものであった。住居の壁は

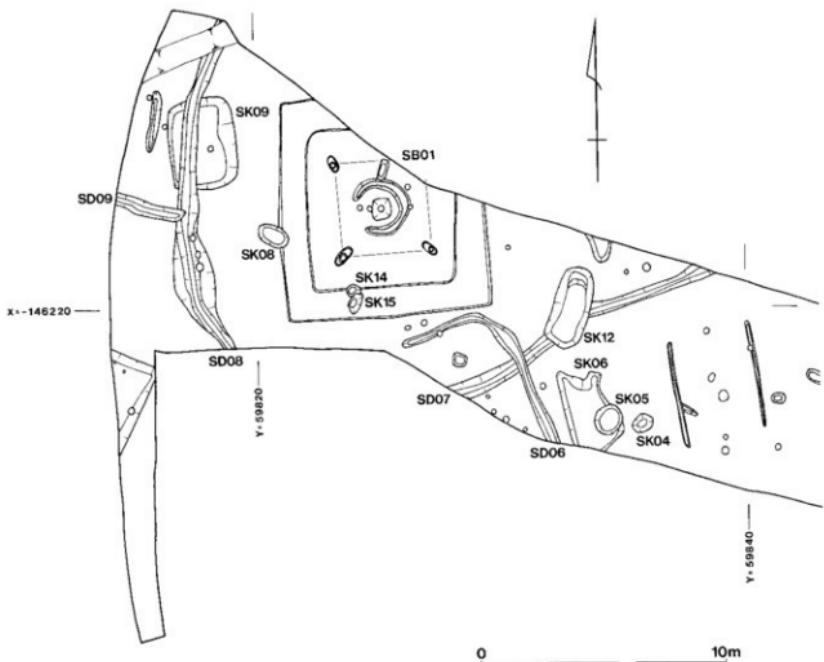


fig. 150 第14トレンチ遺構平面図

削平の為に5cmしか残存してなかった。主柱穴は検出した3基と調査区外に存在すると推測できる1基とで、4本柱で構成するものと考えられる。柱穴は楕円形の掘形を持つもので、深さ55cmを測る。中央土坑は直径80cm、深さ74cmで、周間に高まりを輪状に造り出していた。埋土からは炭化物が出土し、周辺には焼土と炭化物が散布していた。出土遺物から判断して、堅穴住居の時期は弥生時代後期のものと考えられる。

土 坑 SK04・05・08・14・15は同一の埋土状況を示し、SK08から中世の須恵器が出土していることから、同時期のものであると思われるが、出土遺物が細片の為に詳細な時期の確定は出来ない。

SK12 長径3.2m、短径1.5m、深さ35cmの上坑で弥生時代後期の土器が出土している。SD07との間に新旧関係を持つ。

SD02 13トレンチから続く溝に切られているが、幅90cm、深さ21cmで方形に巡るものである。遺物の出土が無く、時期は特定出来ない。

SD06 幅50cm、深さ8cmの浅い溝で、SD01の南側でくの字状に曲がって調査区外に延びている。溝からは、口縁部を下にした壺の一部が出土している。弥生時代後期と考えられる。この溝はSD07に先行するものである。

SD07 幅65cm、深さ43cmを測る溝で、完形品を含む多くの土器が出土している。SK12やSD06に切られているが、SK12の位置で僅かに方向を変えて流れている。出土土器から弥生時代後期のものであると考えられる。

SD08 幅65cm、最大幅1.7m、深さ44cmを測る溝で、一部で炭化物がまとまって出土している。また、最大幅を測る辺りでは多くの土器片が出土している。出土土器から判断して弥生時代後期のものと考えられる。

SD07とSD08は位置関係や、溝の規模、埋土の状況から判断して、調査区外でつながっているものと考えられる同一の溝であろう。また、この溝はSB01の周囲を囲むように掘られていると思われる。

SD09 埋土の状況が他の溝とは異なるもので、SK04等と同時期のものであると考えられる。時期の詳細は不明であるが、中世のものと思われる。

第15トレンチ これまでの調査区とは第2神明道路を挟んだ北側に位置する調査区で、土坑4基、溝1条、ピット十数基を検出した。

SK01 長径3.2m、短径1m、深さ46cmの土坑で、遺物の出土は無い。

SK02 一辺1.3m、深さ19cmの方形土坑で、弥生時代後期の土器片が出土している。

SD01 幅5.4m、深さ70cmの大溝で、第15トレンチを北西から南東方向に斜めに走っている。溝の底はほぼ平らで、途中で角度を変えて立ち上がり、一部では上層の幅を括げている。溝からは完形品数点を含む大量の土器が出土し、銅鏡1点、菅玉1点が出土している。出土土器は弥生時代後期のものである。

SD01の北側には遺構が無く、基盤層は軟弱なものであった。生産地であった可能性が考えられるが、水田畦畔等の遺構は確認出来なかった。

ピットが數基検出され、いくつかは列を成すものも確認できたが、建物を構成するものは捉えることが出来なかった。柵列の可能性が考えられるが、確証は無い。

第16トレンチ 第15トレンチの東側に位置する調査区で、溝を1条検出したのみであった。この溝はトレンチの北端付近から南に向かって流れているので、幅80cm、深さ7cmの浅い溝で、中世の須恵器の細片が出土している。

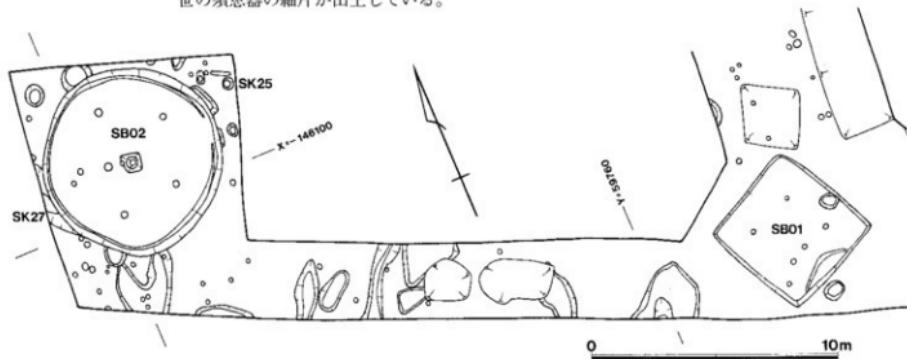


fig. 151 第17トレンチ遺構平面図

- 第17トレンチ 第15・16トレンチの南側に続くトレンチで、竪穴住居2基、土坑24基、溝8条、ピット數十基を検出した。
- SB01 第15トレンチとの接合部分で検出された、一辺4.7mの方形竪穴住居である。主柱穴は4基で、一辺の中央に直径65cmの炉と思われる土坑を検出した。竪穴住居の時期は弥生時代後期のものと思われる。
- SB02 調査区でその一部が検出され、全貌を明らかにするために調査区を拡張した。その結果、直径7.4m、深さ37cmの円形竪穴住居で、周壁溝がほぼ全周するものであることが判明した。竪穴住居の中央土坑は、浅く方形に穿った後に円形の掘形を持ち、一辺80cm、深さ28cmで、埋土には炭化物を含んでいた。主柱穴は5基で、柱穴からは比較的大きな土器片が出土し、その内の1基からは、ミニチュアの壺形土器の完形品が口縁部を上に、底部を下にして、置かれたように出土している。竪穴住居の時期は弥生時代後期であると思われる。
- SK27 SB02に切られ、調査区外に続く土坑であるが、土坑からは焼土とともに弥生時代前期の土器が多く出土した。この土坑の他にSK25からも弥生時代前期の土器片が出土している。SB02に切られている土坑は弥生時代前期のものであると思われ、周辺には同時期の遺構が存在する可能性がある。
- SD01 調査区の中央部で検出した大溝で、北西から南東方向に走っている。溝の幅は5.5m、深さ77cmを測り、底は平らで、溝の東側の立ち上がりは、いったん平坦部を有してから立ち上がる。溝からは完形品を含む多くの土器が出土し、管玉が2点出土した。



fig. 152 第17トレンチ SB02

第18トレンチ 第17トレンチの東側に離れて位置する調査区で、掘立柱建物1棟、土坑4基、ピット數十基を検出した。

SB01は3×2間の掘立柱建物で、桁行4m、梁行4.8mの規模で、柱間は桁行が2mで梁行は1.5m前後である。掘形は直径70cm前後で、深さは、浅いもので23cm、深いもので68cmであった。このような掘形をもつ遺構はこれまでの当遺跡の調査では初めての例である。この掘立柱建物からの出土遺物は少なく、時期決定が困難であるが、6世紀以降の須恵器片が出土している。

SK01はトレンチの北端部で検出されたが、中世の鍋の土器片が出土している。この土坑が検出された所は丘陵裾部に位置し、旧地形が削平されている。中世以前に削平され、中世以後に水田利用されたものと思われる。

3.まとめ

今年度調査された小山遺跡の範囲は、昨年度調査の北側に位置するが、円形竪穴住居を4基、方形竪穴住居を2基、掘立柱建物を1基検出する等、その調査成果は大きなものであった。今年度の調査で検出された竪穴住居は、昨年検出された第8トレンチの方形竪穴住居よりも若干時期の遅るもので、小山遺跡の集落の変遷を考える上で貴重な資料となるものである。

特に第14トレンチで検出されたSB01は高床部を持つ方形の竪穴住居で、周囲を溝が巡ると考えられ、小山遺跡の集落の中でも特別な意味を持った遺構であると考えられる。

第9トレンチのSD01から北西方向に向かう、第10トレンチのSD01、第12トレンチのSD01、第11トレンチのSD03は全て同一の溝であると推定出来る。また、第12トレンチ北西部の現道路部分の未調査部分で第11トレンチのSD02が溝本流に合流するものと考えられる。この溝はさらに北側の第15・17トレンチで検出された大溝と同一の溝であると思われ、この溝は集落を北西から南東の方向に縦断している。そしてこの溝から大量に出土した、投棄されたであろう弥生時代後期の土器は、集落の繁栄を示唆するものである。また、第15トレンチのSD01から出土した銅鏡や管玉も繁栄を傍証するものであると思われる。

第11・12トレンチで検出された12世紀の遺構は、条里地割りと方向性を同じくすることや、第11トレンチのSD05が屋敷の境界溝であることを想起させることなどから、同時期の集落の存在も明らかになってきた。

第17トレンチの西端部で検出された弥生時代前期の遺構は、これまでには第8トレンチで同時期の遺構が検出されたのみであったが、第17トレンチでも同時期の遺構が確認されたことは、周辺に同時期の集落が存在した可能性が考えられる。

第18トレンチで検出された掘立柱建物は時期が特定できないが、これまでに検出されていない時期の遺構であることから、小山遺跡の集落にさらに一時期を加えるものである。

このように、今年度の調査では、昨年度の調査で明らかになっていた弥生時代前期の遺構、古墳時代初頭の遺構に加え、さらに時期の異なる遺構が判明し、小山遺跡が複合大集落遺跡であることが明らかとなった。小山遺跡の歴史的価値は、明石川水系の集落変遷を考える点でも、また弥生時代後期の多くの資料を提供したという点でも貴重なものであると思われる。

24. 玉津田中遺跡 第7次調査

1. はじめに

玉津田中遺跡は、明石川中流域左岸の洪積段丘から沖積地に広がる遺跡である。発掘調査は、昭和57年～平成3年度にかけて兵庫県教育委員会によって実施されており、縄文時代から鎌倉時代の遺構が検出されている。今回の調査対象地の平野地区は、県営平野地区土地改良事業に伴い、昭和63年度に実施された分布調査の結果、埋蔵文化財の存在が明らかになった遺跡である。平成元年度以降、試掘調査と本調査が実施されており、弥生時代前期・後期、古墳時代中期・後期の集落跡・流路などが検出されている。またこれらの周囲に広がる水田跡との関わりが徐々に解明されつつある。

調査地に最も近接する遺跡として、福中城址（室町時代）がある。この他に周辺の遺跡として北方に常本遺跡（弥生時代・古墳時代）、黒田遺跡（弥生時代・古墳時代・平安時代）、西戸田遺跡（弥生時代～鎌倉時代）などが、東方には芝崎遺跡（弥生時代～鎌倉時代）などがある。また南方には、出合遺跡（弥生時代～鎌倉時代）、居住・小山遺跡（弥生時代～鎌倉時代）、居住遺跡（弥生時代～鎌倉時代）などがあり、西方の明石川西岸丘陵上には、上喰池遺跡（旧石器時代）、印路遺跡（縄文時代～平安時代）などがある。

これまでの調査結果から、以上の遺跡の中で玉津田中遺跡は弥生時代全般を通して拠点集落としての位置を保ち続け、後の古墳時代へと続いている。

2. 調査の概要

今回の調査対象地は、先年度（平成5年度）の未調査箇所である16トレンチ4～6区の第4造構面の一部とその下層、18トレンチ4～6区の第4造構面より下層及び19・20トレンチの第1造構面より下層を対象として調査を行った。

今回の調査区は、先年度微高地Aとした部分とその周辺部分に該当する。

微高地 A

先年度調査を行った第1造構面（T.P.20.50～T.P.20.70m）では、古墳時代初頭の堅穴式住居4棟、溝10条、土坑7基、柱穴等が確認されている。その下層については暗茶灰色

(19・20)

トレンチ）粘性砂質土をベースとする第2造構面（T.P.20.40m付近）、灰黄色細砂をベースとする第3造構面（T.P.20.20m付近）の2面の造構面が確認されたが、いずれも遺物を含まない自然流路が3本検出されたのみである。その下層については青灰色シルト層（T.P.19.40m）まで掘削を行ったが、遺構・遺物は確認されなかった。古墳時代初頭以前に比較的高位の湿地状の土地であったところに洪水により運ばれた土砂が堆積して微高地を形成したものと考えられる。各流路の規模は下表のとおりである。

遺構名	遺構面	幅(約)	深さ(約)
A-SD201	第2造構面	4.0m	0.8m
A-SD202	第2造構面	4.0m	0.8m
A-SD301	第3造構面	5.0m	0.5m
A-SD302	第3造構面	5.0m	1.2m

いずれも遺物が確認されていないために流路の時期は不明であるが、先年度検出したA-SD05～07はこれらの流路の最終堆積であり、弥生時代終末～古墳時代初頭以前の流れである。

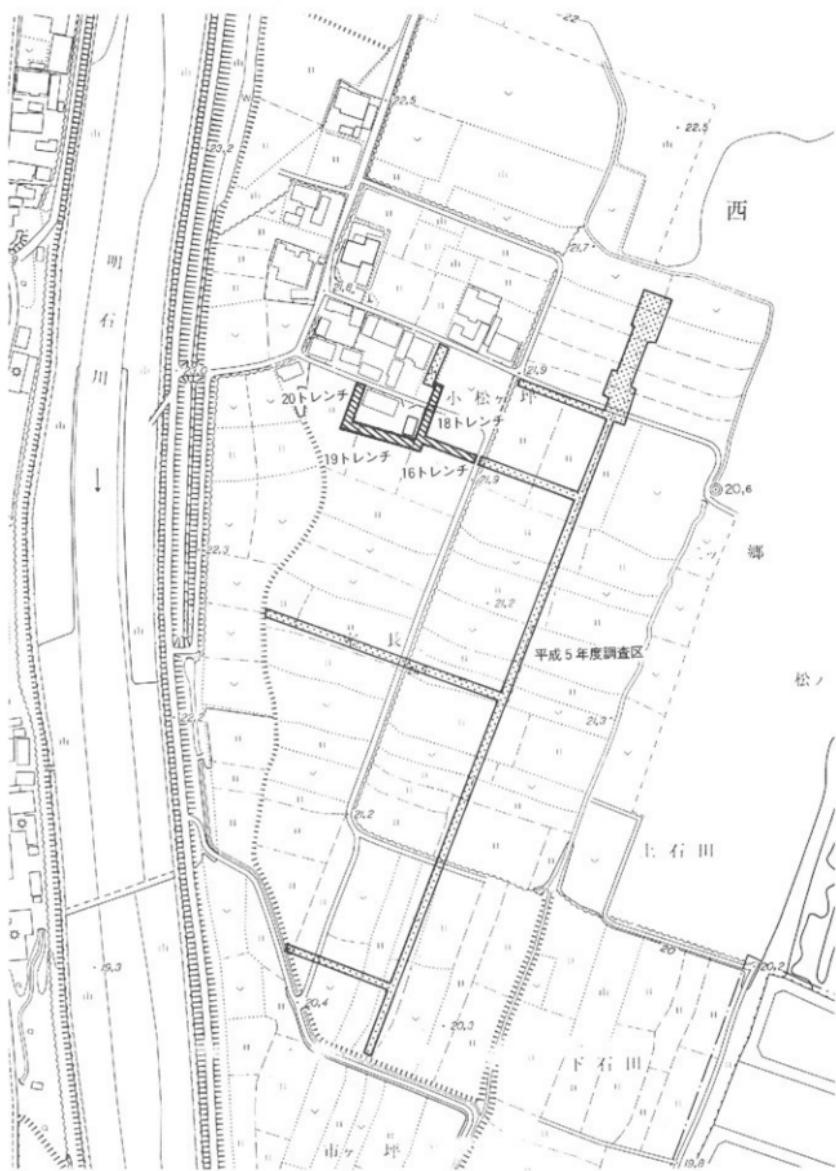


fig. 153 調査地点位置図 1 : 2,500

微高地周辺
 (16・18
 トレンチ) 微高地 A の東縁にあたる部分である。16・18トレンチは幅がいずれも約2.5mであるため全容は明らかでないが、この部分での微高地縁辺はほぼ南北に伸びていると考えられる。
 両トレンチでは、微高地から後背湿地にかけて流れ込む堆積が層序をなしている。検出した遺構面は、先年度一部未調査であった第4遺構面（弥生時代終末～古墳時代初頭 T.P.19.90～20.00m）、第5遺構面（弥生時代後期T.P.19.60～20.00m）、第6遺構面（弥生時代後期T.P.19.00～19.20m）の3面である。

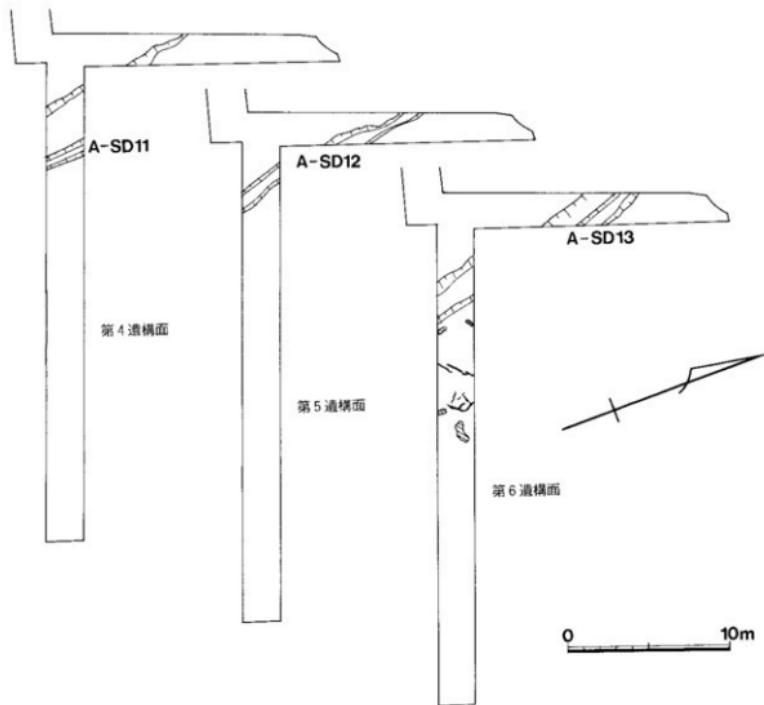


fig. 154 遺構平面図

第4遺構面 16トレンチの乳灰色シルト層上面において検出した幅約2m、深さ約0.2mの溝である。

A-SD11 先年度検出したA-SD08の下層と考えられる。小型丸底壺3点、高环3点などを含む土器が出土した。

第5遺構面 幅約2m、深さ約0.2mの溝である。溝を中心周辺でも多くの土器が出土しており、

A-SD12 いずれも完形に近いものである。18トレンチでは北側の肩部が不明瞭であり、微高地端の堆積層の一つである可能性が高い。

第6遺構面

微高地端部斜面の黒灰色砂質シルト層から平坦面の青灰色細砂層にかけての面で土器溜まりが4か所確認された。土器溜まり1・4では土器は細片の状態であったが、土器溜まり2・3についてはいずれも完形に近い状態で遺物が検出された。付近では流木が出土しており、埋土の状況などから緩やかに水が溜まっていく状態の時に土器が投棄されたと考えられる。

遺物

遺物は大半が微高地からの流れ込みによるものであり、溝と称した遺構についても微高地端の浅い溜まり状の痕跡である可能性が高い。出土状況は細片の多い層もあるが概して完形に近いものが多く、投棄されたまま埋没したものと考えられる。いずれの時期の遺物も器壁が薄く、焼成は堅緻である。器種構成は、甕を中心として高壺がそれに次ぐ状況である。また16トレンチ第6遺構面において浅形の木製容器が出土した。長辺約30cm、短辺約10cm、高さ約5cmで、底部には穿孔が施されている。

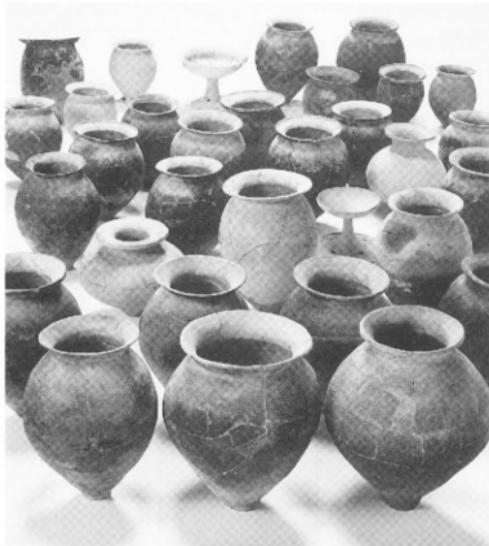


fig. 155
微高地A端部出土土器

3.まとめ

今回の調査では、微高地端での流れ込みと考えられる堆積層が比較的良好に遺存していた。多くの遺物は生活に使用されたのち、そのまま投棄、あるいは細片となって下方へ流れ落ちる土に混入したものと考えられる。今回、微高地において古墳時代初頭以前の集落の存在は確認されなかったが、微高地端で弥生時代中期～後期の遺物が多く出土したことから、当該時期の遺構が存在したと推定される。現在も比較的周囲より高い土地には住宅が建っており、微高地Aはさらに北に帶状にのびている可能性がある。また、微高地周辺の後背湿地には井堰を設けており（先年度18トレンチ4区で検出した杭列や17トレンチのマウンド状の施設）、微高地を取り巻く近接地に区画杭等の施設が設けられていたと推定される。

IV. 平成6年度の大規模試掘調査

概要

神戸市では、各種開発・造成工事に伴い、埋蔵文化財の存否を確認する試掘調査を実施している。主として、住宅建設等に伴う小規模な試掘調査は、今年度は203件であった。それ以外に、大規模な地形改変を伴うものとして、土地区画整理事業および土地改良事業（圃場整備）などがあり、毎年広範な地域で試掘調査を実施している。これらの試掘調査によって、新たに発見される遺跡があるのはもちろんあるが、周知の遺跡でも、その範囲内での遺構の状況等が明確になり、遺跡のより詳細な内容が把握できるようになってきている。

平成6年度に実施した大規模土地改変に伴う試掘調査は、土地改良事業に伴うものとして北区八多地区、西区木津地区、松本地区的各土地改良事業がある。八多地区の上小名田遺跡では中世の遺物包含層・遺構が確認され、平安～鎌倉時代の集落跡として知られる当遺跡の広がりが認識できた。松本地区（松本遺跡）では、平安時代末～中世の遺物包含層・遺構が確認された。

また、西神南ニュータウン建設の造成事業に伴い、以前より弥生土器が採集され、高地性集落の存在が指摘されていた「城ヶ谷」において、遺跡の所在の有無、その範囲や性格を明らかにする目的でトレーナーを設定して試掘調査を実施した。その結果、尾根部を中心として、事業予定地内のはば全域において弥生時代中期～後期の遺物・遺構を確認した。さらに古墳時代～飛鳥・奈良時代の遺物も多く発見されており、当該期の遺構が存在する可能性も考えられる。西神地区では弥生時代中期の高地性集落は多く発見されているが、後期のものは城ヶ谷遺跡が最初の発見となる。

試掘調査は、基本的に平面2mの方形で設定し、バック・ホールまたは人力により遺物包含層上面ないしは遺構面直上まで掘削し、その後、平・断面の精査を行っている。また、必要に応じてトレーナー調査で確認している場合もある。

大規模試掘調査一覧

事業名	遺跡名	試掘坑数	試掘面積	試掘調査結果
八多地区土地改良事業	上小名田 附 物	179	633m ²	中世遺物包含層・遺構
松本地区土地改良事業	松本	12	50m ²	中世遺物包含層・遺構
木津地区土地改良事業	木津	82	328m ²	中世遺物包含層
西神南ニュータウン建設	城ヶ谷	トレーナー	1,500m ²	弥生中～後期遺構・遺物 古墳～奈良遺物

凡例



試掘調査
対象範囲



試掘調査
地点



遺跡存在
範囲

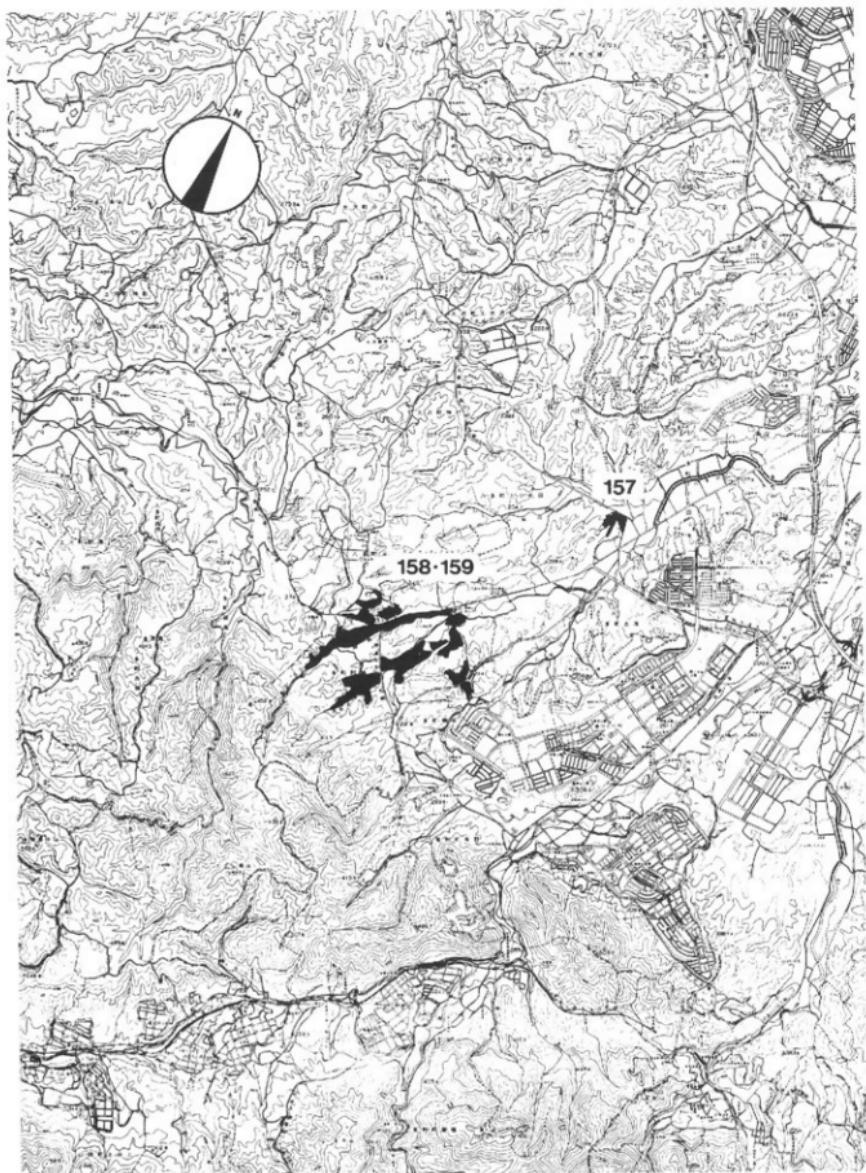


fig. 156 北区試掘地域全体図

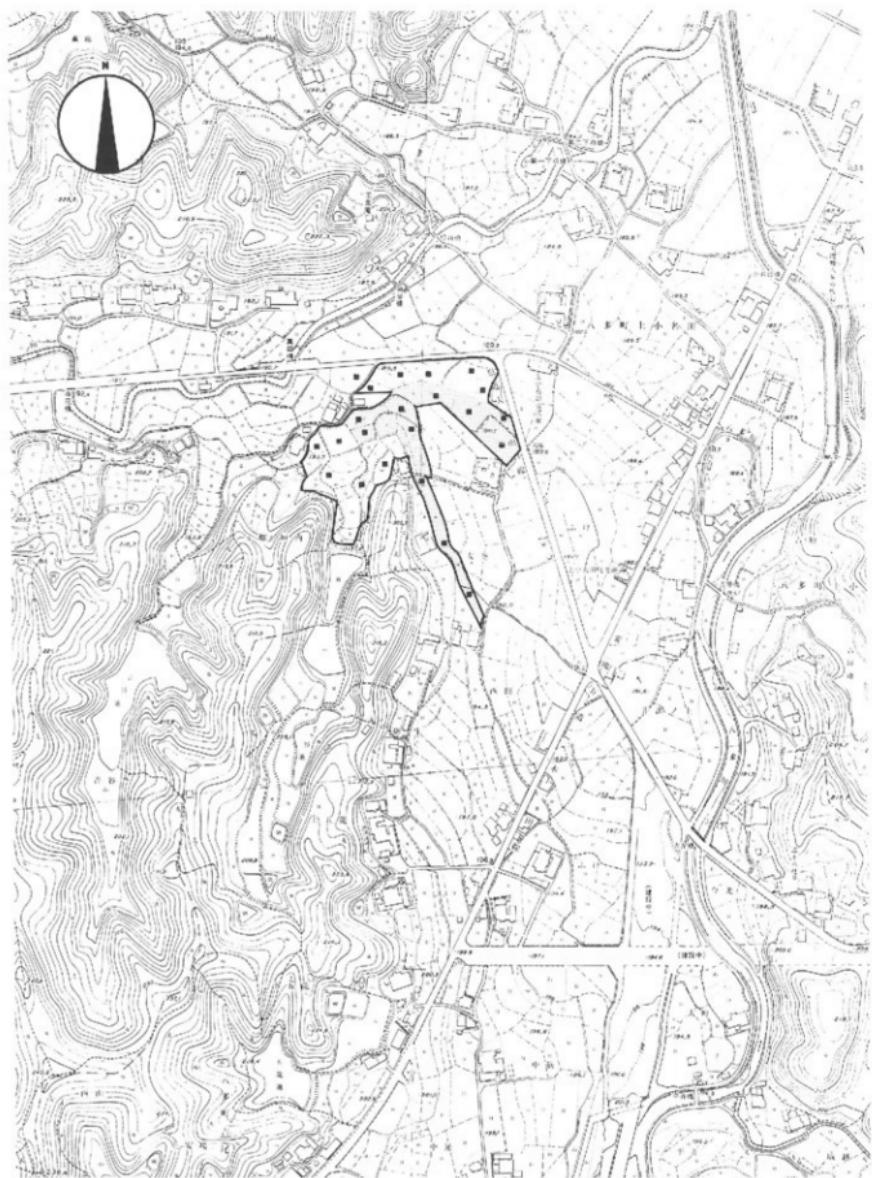


fig. 157 上小名田地区試掘調査地点 (S = 1/5,000)

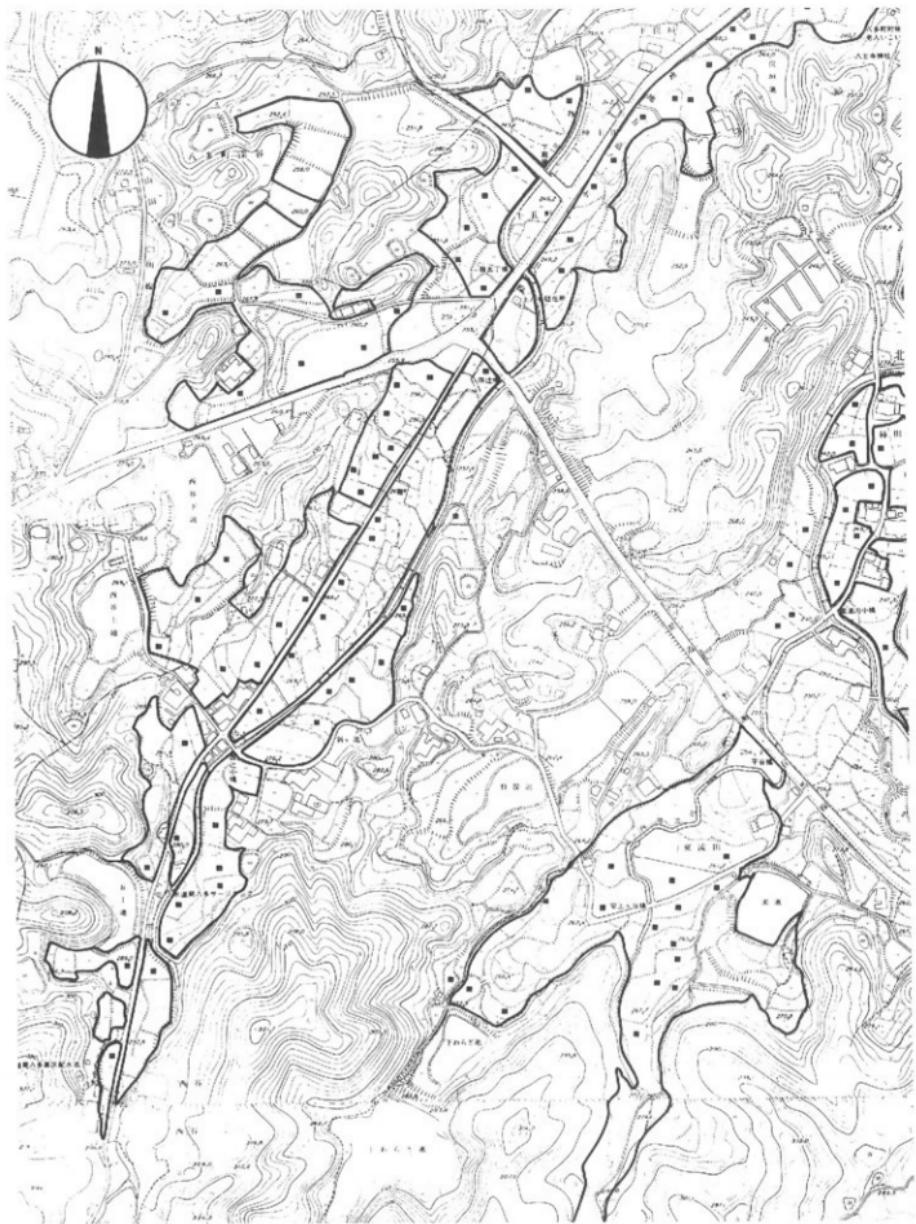


fig. 158 八多地区試験調査地点 ($S = 1/5,000$)



fig.159 八多地区試掘調査地点 (S = 1/5,000)

fig. 160 西区航测地形单体图

